# 守貞漫稿

巻 二十四

30
15

別置

13
20/30
41

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

# 守貞謾稿巻之二十四

喜田川季荘 尾張 守貞誌

歌舞伎ノ名目ハ古ノ日本後紀曰延暦十八年秋七月癸卯朔己酉傳ニ
又歌舞伎ノ名目モ古ノ日本後紀曰延暦十八年秋七月癸卯朔己酉傳ニ
伊勢ノ斎宮新嘗會ニ但シ歌舞伎供九月祭ニ
右ノ如ク歌舞伎ト云ハ古ノ神事ニヨル名目ニテ今世歌舞伎ノ中古ノ祖ト云
ヘキ出雲ノ於国モ其初大社ノ巫女ナルガ故ニ神楽ヲ一変シテカフキト号ル
羅山文集曰今之歌舞伎非古之歌舞伎也若教坊梨園及小蠻樊
素之流所謂古之歌舞伎也男服ニ女服女服男服ニ断髪為男髻横
刀佩嚢之類男女相供且歌且踊此今之歌舞伎也出雲淫婦九二者
始者之列国都鄙皆習之云
そゞろ物語曰慶長ノ比ホヒ出雲ノ国ニ小村三右ヱ門トキ人ノ女ニ九二トキヲ容チ
優ニ心サヱヤサシキト遊女候シガ云ヒ此遊女ノ名ヲ歌ヒ折曲ニ
ヒ鞠巻ヲ女シ北ノ對馬守ト名ヲ今様ヲ謡ヒフシヨノ誉シ世ニ比ル顔色
無双ニシテ神ヲヒルガヘス粧ヲ見ル人心ヲ惑ハセリ夫ヲ見ヨリ以来諸国ノ
遊女其形ヲマネビ一生ノ役者ヲ揃ヘ舞臺ヲ建置笛太鼓ワビヲ折鳴シ
嵐本ヲヨリ立テ是ヲ諸人ニ見セケルヨリ
京童日抑歌舞伎ト云ハ出雲ノ神子ノ舞ヲ学ビ始シ此神子佛号ヲ唱ヘ

男舞

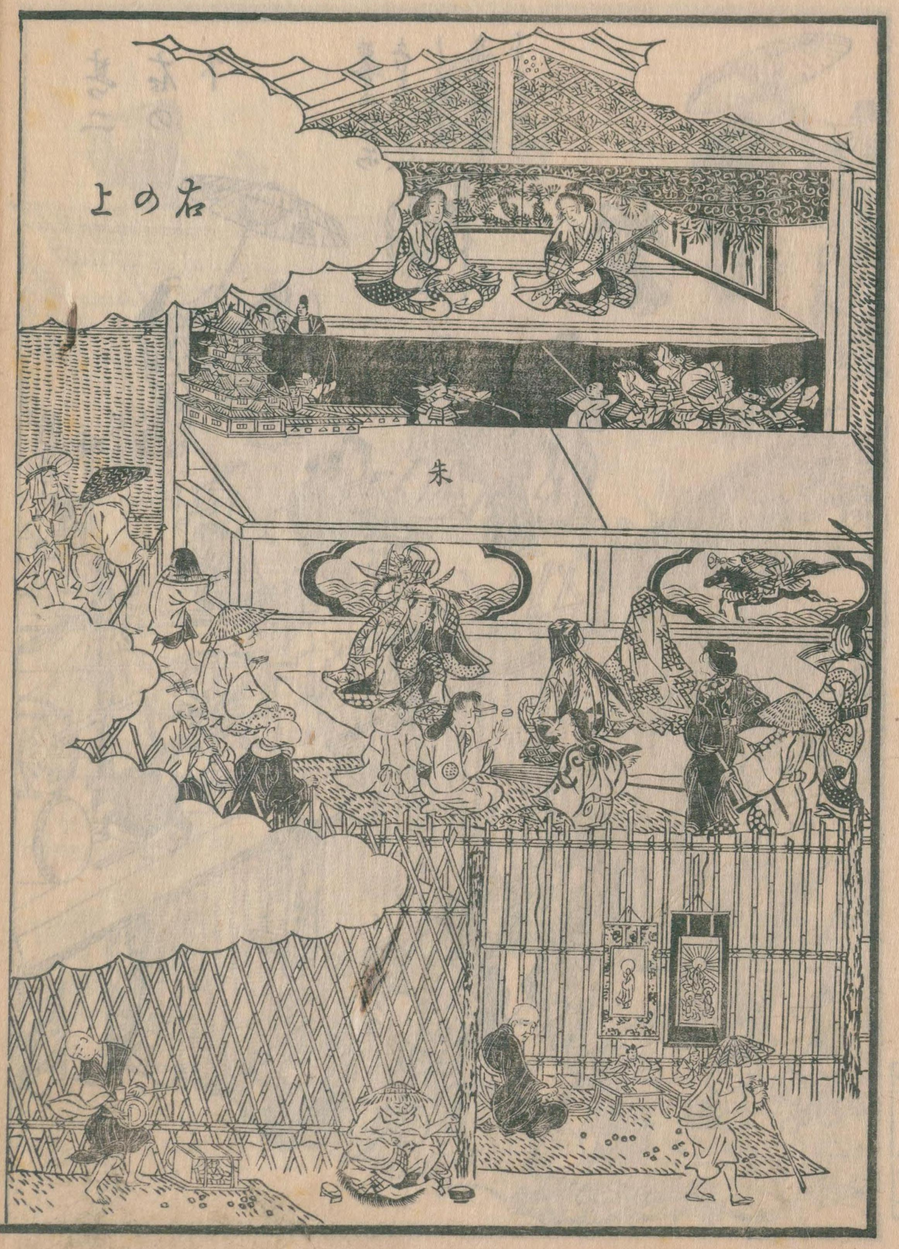
鉦ヲ鳴シ念仏踊セシ後又刀ヲ横ヘ胴ノ裏東ニテ歌舞ス夫ヲカブキトイヘナリ
シ来レリ云々
東海道名所記曰昔々京ニ歌舞妓ノ始シハ出雲ノ神子ニ於国トセル者五
條橋ノ東詰ニテヤヽコ踊リトテヲ致セリ其後北野ノ社ノ東ニ舞臺ヲ拵ヘ
念仏踊ニ歌ヲ交ヘ塗笠ニ紅ノ腰巻ヲマトヒ息鐘ヲ首ニカケテ笛鼓ニ拍子ヲ合セ
テ踊リケリ其時ハ三味線ハナカリキ斯テ三十郎トセ狂言師ヲ夫ニ設ケ傳
助トス者ヲカタラヒテ二條縄手ノ東ノ方祇園ノ町ノ背ニ舞臺ヲ建ツ
舞踊ル三十郎ガ狂言傳介ガ糸ヨリトテ京中コレニウカサレテ見物スル程ニ
六条ノ傾城町ヨリ佐渡島トス者四條河原ニ舞臺ヲ建傾城アマタ出シテ
舞踊セリ云々
云々物語ニ佐渡島正吉トアリテ歌舞伎女ノ太夫也
又一説曰出雲巫女ニ佐渡島於国トス者名護屋山三郎トス者ト通シ国ヲ奔テ
隠国雑劇ノ時ニ文禄中朝鮮征ノ名ニ豊秀吉肥ノ名護屋ニ在テ召々
陣屋ノ野外ニ場ヲ造リ大名トモニ往テ観ル観ル者多クハ草上ニ坐ス故ニ
是ヨリ云々其ノ名紀リ豊氏九ニヲ責ス楽屋ニ所用ノ幕ヲ給ヒ其石
伏見城ニ飯テ赤召々鴨河原ニ観々其時五奉行マレヲ護衛スルニヨリ各々
鎗ヲ擔上ニ置リ今ニ至リ京坂ニ云々擔ニ紙手ノ如キ物式ハ鎗形ノ物ヲ擔ニ
置クハ此遺意シ又初加茂河原ニ行ノ故ニ彼徒ヲ河原者トスノニ乞丐ノ
類ト思フハ非也其始神楽ヲ変シテ舞唄歌ヲノ所名ナルカ故ニ歌舞伎ノ名
アリ蓋当時ノカブキト今世ノカブキ其体大異シ又ロ戸歌舞伎ノ始リモ慶
長十二年二月廿日出雲ノ巫女於国トス者大城辺ニ場ヲ開テ行々ヲ始原トス
蓋当時ハ女俳優ヲ東トシ遊女傾城ノ徒行々也其女俳優ノ坐頭ヲ宮ニテ
和尚トちし 元和年中女歌舞妓禁止アルニヨリ代々美少年ヲ俳優トス
又一説曰永禄年間出雲大社大破ニ依リ巫女於国修覆勧進ノ名ニ諸国ヲ巡リ後
京師ニ出テ室町家ノ武運長久ノ為将軍義輝ノ前ニテ天岩戸ノ俳優シテ
大社造営ノ庁命ヲ聴サレ義輝ニ屋々観々其ニ国女ガ絶世ノ艶色加々歌道
ナドモ抜ナラズ又同時名古屋山左ヱ門トス者アリ元八作々木家ノ浪士ニテ当
時室町ノ御家人シレガ秀才多芸ナリ九ニトモニ狂言盡トスヲ始メ男女共
交テ行々義輝観々其後国女ト山左ヱ門ト密通セシカ終ニ発覚シテ放逐セシ
流浪ノ後天正中信長召々赤歌舞ヲ見ル其後又文禄ニ至リ秀吉モ観
之其時於国水晶ノ珠数ヲ襟ニカケタルヲ水晶見ト云トテ甲冑ニ掛タル珊瑚ノ珠
数ヲ称セ又廉詞アリ当時国カ拵天冠ヲ戴キ白キ衣ヲ着ストシ此ハ延宝
頃迄ニ遺リテ狂言ノ大切ニハ必ラス天冠ヲ着ル者ハ人出テ舞納ムトシ且ヲ
初ハ天冠ノ舞トス延宝比ニハ天人舞トス者トシトシ此国ノ子孫モ於国ノ名ヲ継キ
太夫トナリテ京五條橋ノ西ニテ興行セシヲ於国カブキトちしトさ
又北之居トちハ後者大登日上代ノコヤアリケン南都南圓堂ノ前ニ大ナル穴巣
テ其内ヨリ烟影ヒリ起リ天ガ下ニ霊復ヒ其気ニ当ル者疫疫ニ侵サレケル南都ノ
芝ノ上ニテ猿ノ三番ヲ舞ハセテ其邪気ヲ排退シヨリ芝居ト名ハ初リタリ故ニ今
三至ル迄南都ノ新ノ能ハ故実ニ任セテ芝ノ上ニテ行フ名古屋三左ヱ門ガ於国ガ
カブキモ初メハ北野ノ芝ノ原ニテ興行シケル依テマヽ芝居ト称フル者歟ト
於九ニヨリ前ニ天竺左衛門唐左衛門ナドト云者アリテ管領斯波家ノ書院
ノ廣庇ニ於テ狂言ヲ行ヒ将軍ノ慰楽ニ備ヘシトシ其狂言ハ古軍記ヲ
専ラトストシ又天竺左衛門座ニテ庶永十八年二月京祇園山ニテ興行セ
シ時ノ惣入番付其彼能ノ体ニテ女ハ頭ニ白布ヲアトニ女メキタルヲ又道

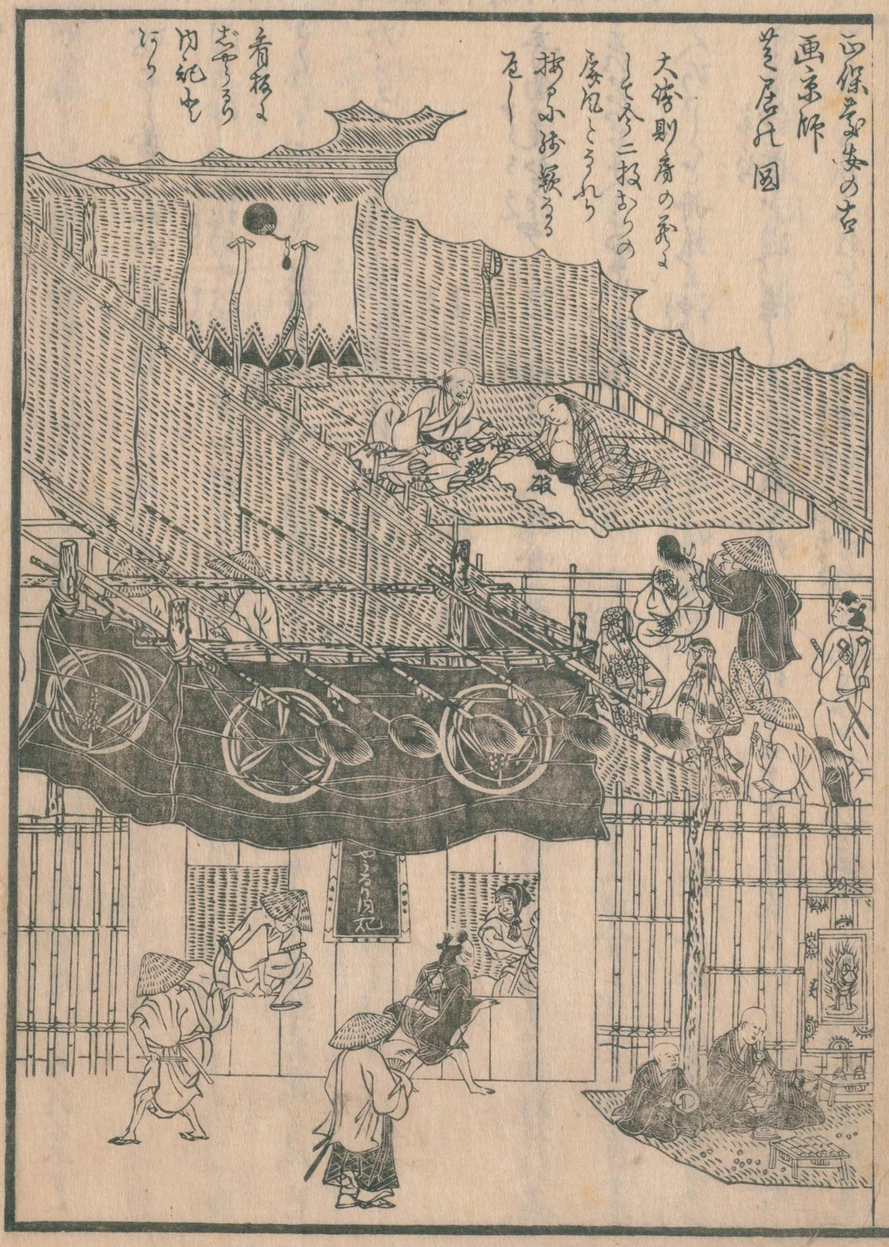
外メキタルモアリトシ

或曰芝居名目大同二年ノ始トストシ

右諸説ノ如ク出雲ノ於国ハ専ラ巫サトヤクヤク遊女氏ヲ云右三門カ女トヤ山三郎或ハ三左ヱ門ヲ夫トヤ其ハ説一定ナラズト雖氏新詮今ノ歌舞妓ノ中興祖ナルヿハ勿論ト蓋シ永禄ノ末年ハ後トシテモ慶長十二年迄ハ凡四十年ナレハ江戸三ノ丸行ノ時ハ既ニ五十餘六十歳ニ迫ヤリケン

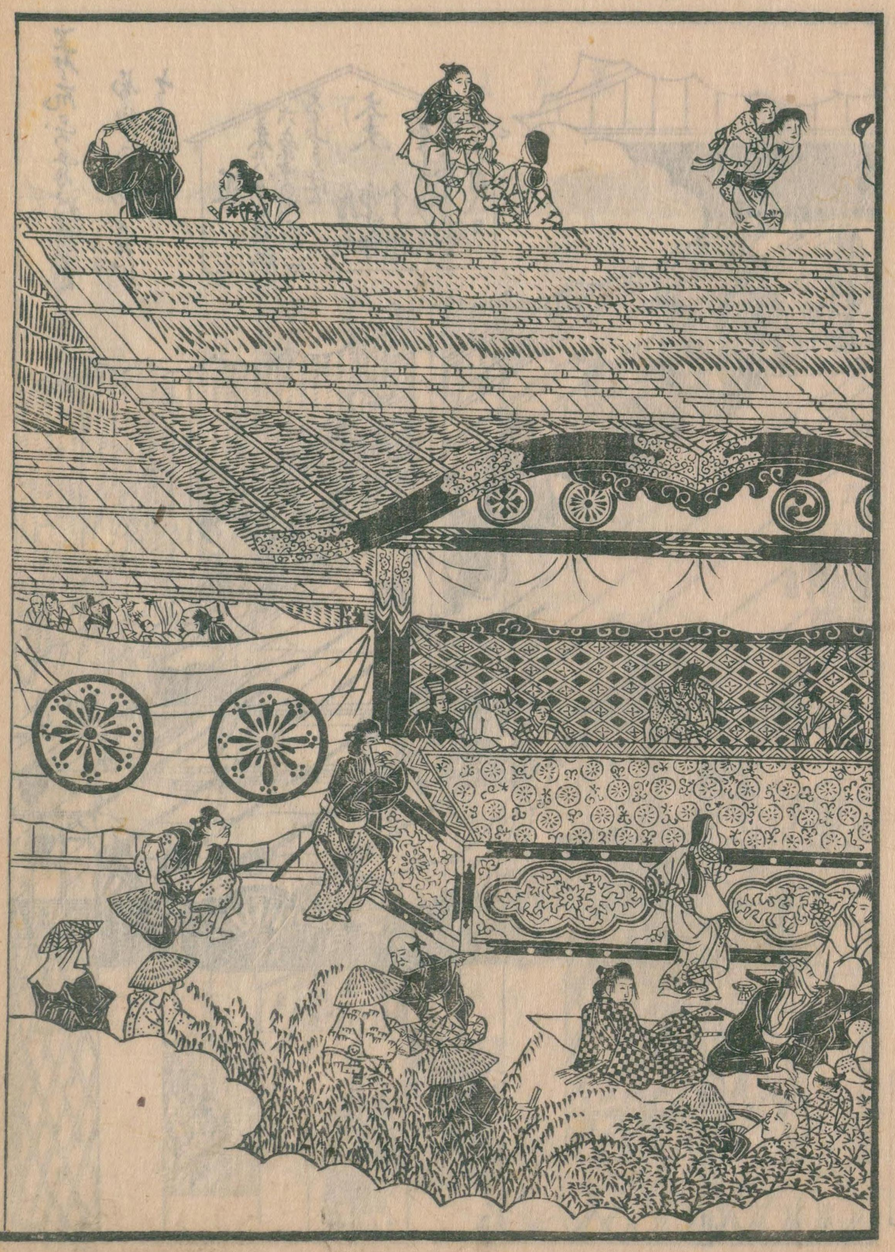
東海道名所記ニ此山のもとの茶屋の女の名を次に清瀧川ハ清瀧ハ清瀧ハ清瀧



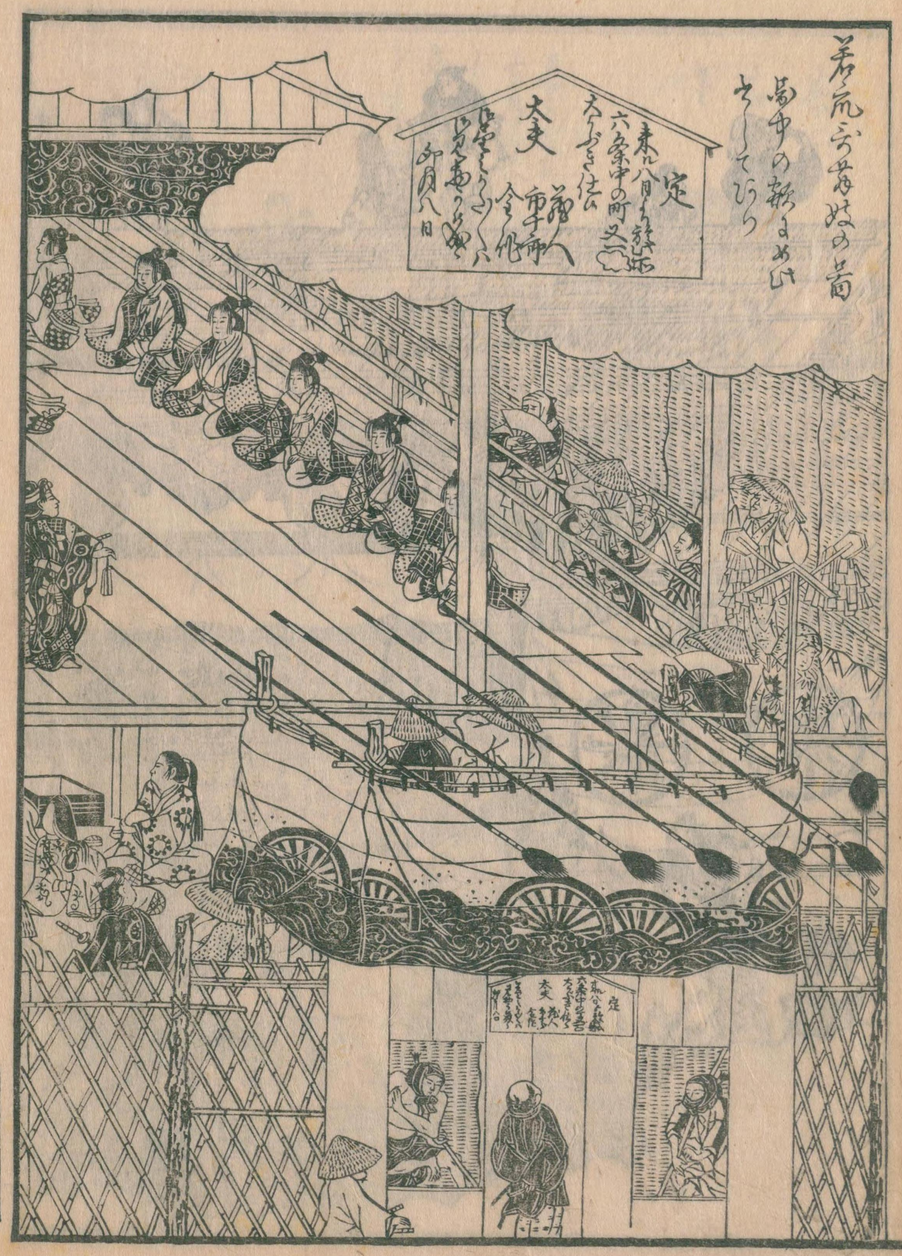





国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

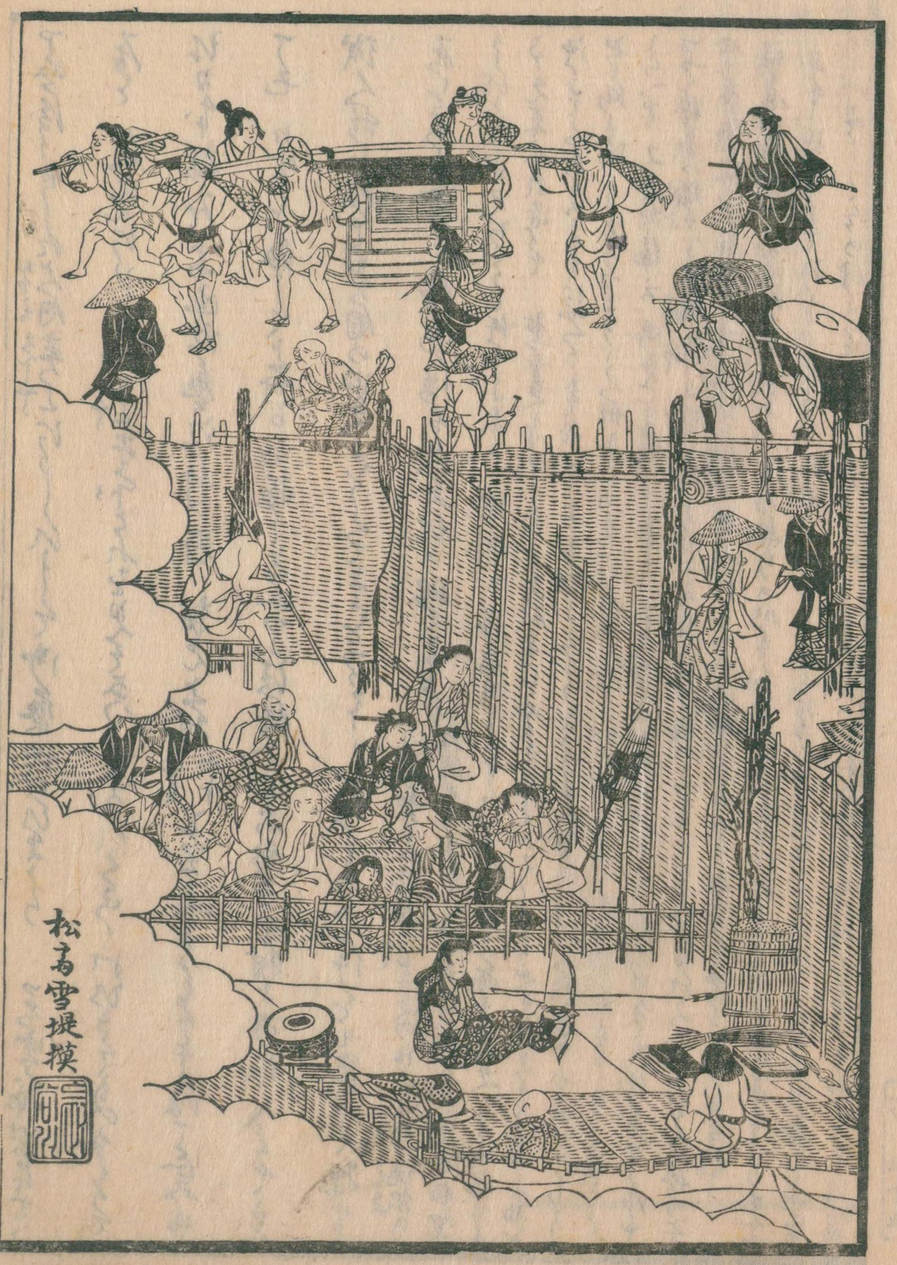


国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用



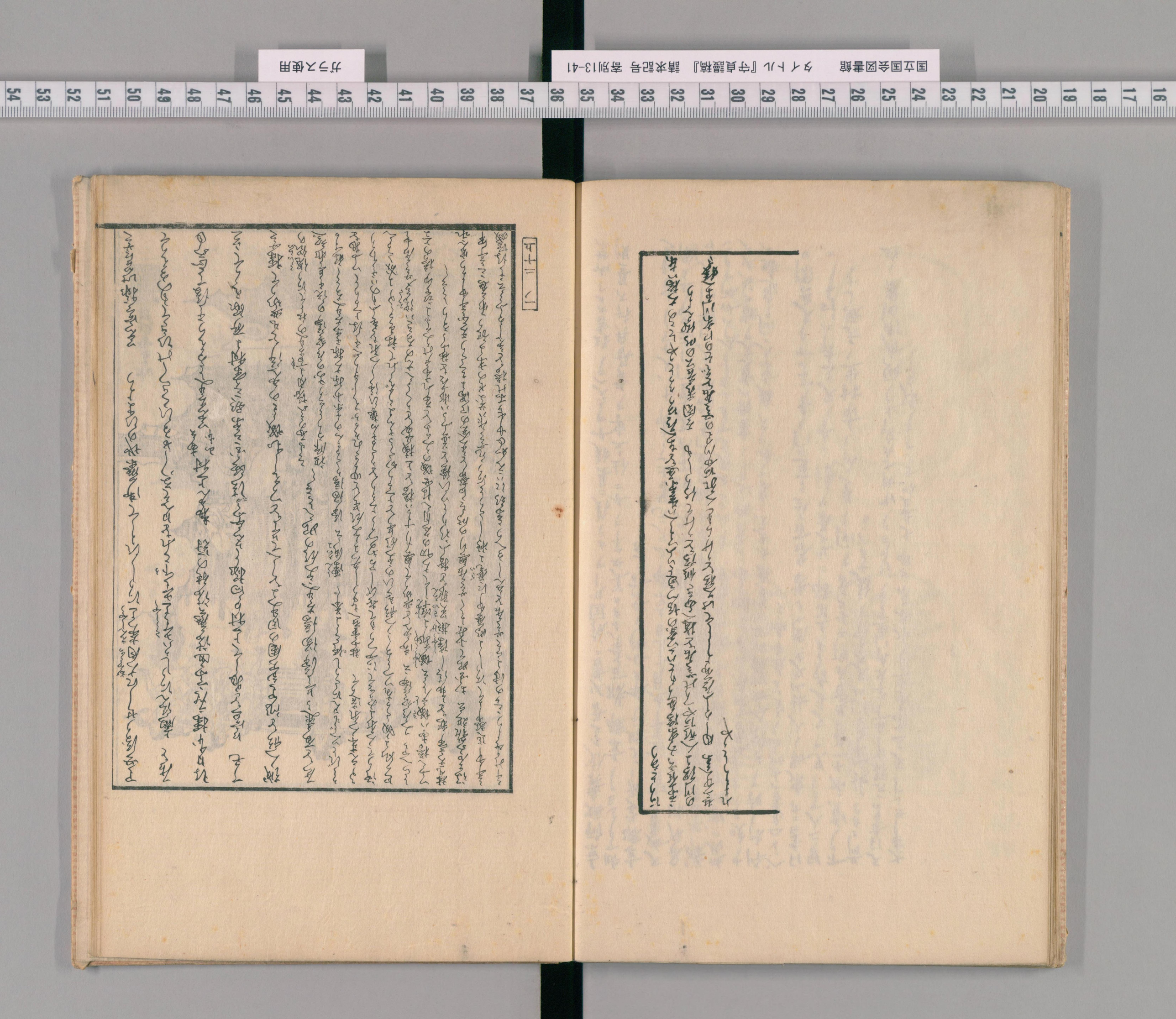



国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

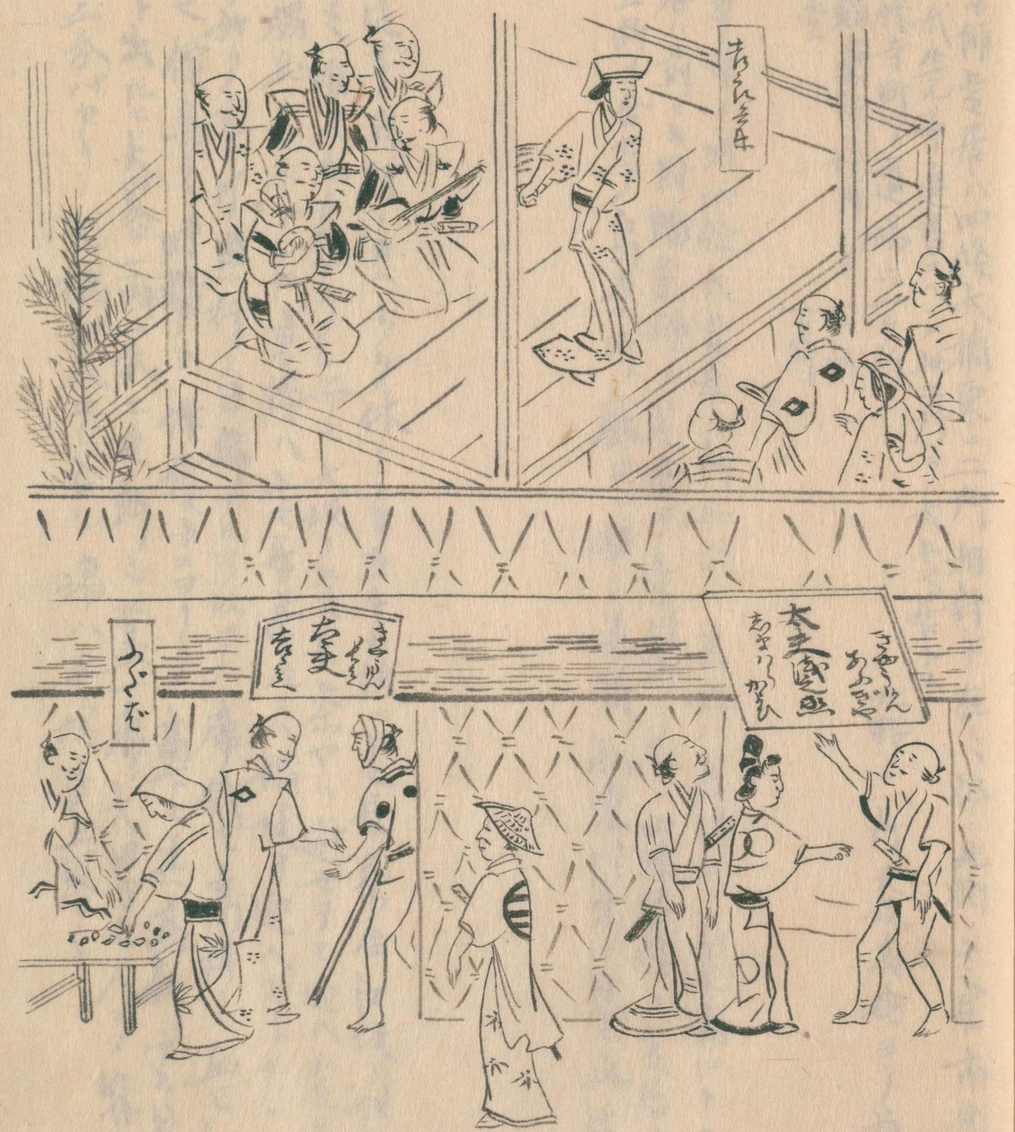


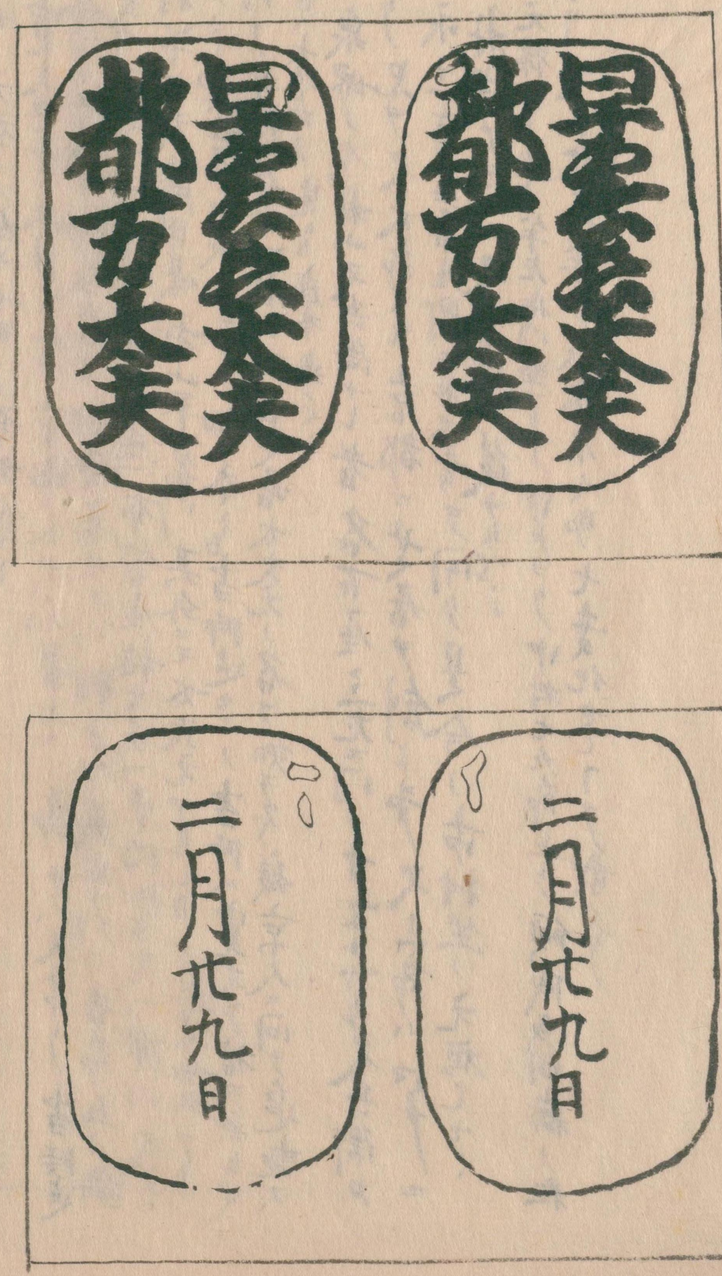
国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』請求記号 寄別13-41
ガラス使用



京師歌舞伎ハ其書ニ於国ガイヲカテ後ニ其後女ヲ交ヘテ狂言ヲ演ス
制アリシヨリ京都都ニ太夫トカヽル美女年ヲ女ニ仕立事ヲ禁ジ居其行ス是則
京都ハ其居ノ元祖ニテ今ハ女形ノ原始シカヽ
又或書ニ寛文九年五月十三日京都太夫元書上ノ節十八人トアリ当時迄
名代相續スル者早咲長吉ト早雪長太夫ト「蛭子屋」義右エ門ト吉郎兵衛ト
「都」半太夫ト万太夫ト「亀屋」条之丞ト「布袋屋」梅之丞ト「宗治」加太夫ト「津川」大吉
此外ニ中村半太夫藤田某「村山平右衛門」其外ニモ太夫元アリシカド今ハ如何ナリシ
ヤ知ラズ。此書嘉永三年ノ物ノ本ニ。当時迄ニ
刊行ノ時ヲカヽ今世四條以下ノ其居太夫元ノ名ヲ知ラズ後京人ニ問テ追記ス
ベシ〇追書ハ大坂白ノ定ル座本無之シ
日書ニハ泉堺ノ人村山又兵衛ナル者名古屋ニ元居ヲ創シ市ヲ又之郎ハ江戸ニ
男二人アリ兄ヲ又太郎ト上京都ニ其居ヲ開リ是今ノ市村生ノ元祖ニテ
下リ寛永十一年芝居屋町ニ其居ヲ開リ後ナルベシ
前ニカヽル村山平右衛門ハ又太郎ノ中村七太郎上リ傾城浅間嶽ノ狂
又日書ニ元祖中山下半九衛門坐アリテ江戸ヨリ
大当リセシテ又三木屋坐ニテ水木辰之助七変化セシヲ載ス






公験俗ニ切手ト云

近世京師芝居ハ四條大橋東ニ二所相對シテ在ル俗ニ北側ノ芝居南側ノ芝居
トス名代生元菁追書スベシ此二所ヲ大芝居トス　北野ニ一所　天保府命ヨリ前ニ七ブ
其他四條寺町ノ道場ニ一ケ所
寺町鶏薬師境内ニ一ケ所
六角堂一所

天保革命ノ時四條大芝居二所如故ニ其他ハ宮川町島原廓ロトニ所ニ
迄ス猶ハ前ニ云因幡薬師ノ芝居ヲ宮川町ニ迄シ四條道場ノ芝居ト六角ノ
芝居二所ヲ合セテ島原町廓ロニ移シ其後松原川原ノ東ニ再迄ス

京師迄手與行ノ日ハ少ク休ミノ日多キヲ故ニ芝居茶屋江坂ノ如ク数
ヲ無ク唯ハ九ヲアルノミ而モ大坂ノ芝居茶屋ヲハ遊女ヲモ迎ヘ芝居体ニ
ノ日モ偶然ノミニ非ザレバ京都ハ芝居茶屋ニハ娼妓ヲ迎ヘズトナシ
又右ノ如ク手中與行ノ日稀ナルヲ以テ席銭モ高料シ無ク江戸
如ク定價無ク時勢ト俳優トニヨリテ直下ス其高料ナル日ノ價
桟敷上下出ル大畳二両一分二朱詰シ豆一席大畳モ人ヲ容レ
場金三分バカリ大桝四人ヲ六合ル場ハ平場ノ上畳シ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

右ノ番ハ八十翁物語ニ載タリ印行ノ時更キ加ヘシナラン唯編古番トノミ有ノ
手号モ出所モ結サズ愚按ニ天和中女歌舞妓 官禁アリテ若衆ヲ以テ
行ハレトアレハ此番其ハ同ノ物歟ト見ルニ人物ノ凡絡 元禄比ノ物ト見ユレト天
和モ多ク同ナケレハ相似タル歟且笠屋三郎ハ何国ノ者歟 義太夫節ニ大坂長
町ノ住トシタレハ因テ二非ルヒ大坂ノ条ニ有ニ入ル猶後考スベシ
守貞再考スルニ右ノ番刊行ノ時古番ニ倣テ更キシ物歟其如何ハ直接
トスル時ハ右番ト寛文ノ番小屋制度異ナシ寛文ノ番ハ草莚囲ヒシ又ハ
ナトトスル時ハ小屋制寛文番ニ粗相似タリ尚能追考スベシ

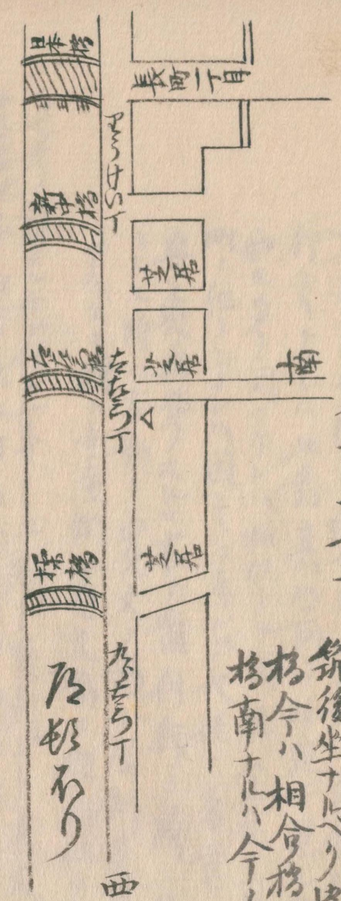
追考 式書ニ享保十一年ノ上梓ヲ写載タリ其文ニ曰一本榎町五丁目之儀八十年以前ヨリ
芝居地ニテ狂言座山村長太夫森田勘弥舞坐笠屋三勝相大内蔵能坐河原崎権之助
猿之ハ江戸本榎町ニ在リシテ顕名タリ

大坂芝居ノ式物ノ本曰 上略 於国トヨリ太夫本ニテ京五條ノ西ニテ興行ス世ニ云於国
カブキ是シ浪華ニテハ太夫蔵人トモ一座アリシ是モ男女入交リテノ狂言ナ
リシトカヤ云ヘリ 茶屋 遊廓ニ女カブキ 禁令 制ナレハ蔵人トモ坐元アリシハ其前ナルベシ
前ノ茶屋廃ル番ニ太夫蔵人ノ芝居京ニアリ日人ナルベシ
又延宝嘉永三年ニ刊行ロル物ノ本ニ云大坂太夫元ノ宽永二年比迄ハ若衆カブキ
アレヒ太夫元座元トモ者ナシ其後九郎左衛門町ノ裡通下難波領ニ遊所アリ此所ノ
遊女ニ手踊リ小舞ナドヲ教ハ其頭ヲ於国トモ云ヒハ此坐ヲ於国カブキトモ此時
坐元塩屋九郎左衛門ニ是則大坂座元ノ始シ 日六年女歌舞妓 禁止ト成テ又々
若衆ノ前髪ヲソリテ狂言ヲ勤メシ寛文年中迄大ニ流行ス是ヨリ塩屋茶屋
三門大和屋甚兵衛等ハ連綿相続ス今ノ大坂道頓堀ノ芝居也サレド当時ノ座
本ハ古代ト違ヒタリ中器大坂ノ太夫元ハ名前バカリ続メルニテ其本人モ恬ナラズ
ソノハ相続モ分明ニシテ太夫元ト番ニ元来役者ナレバ今ニ狂言ヲ勤ムル

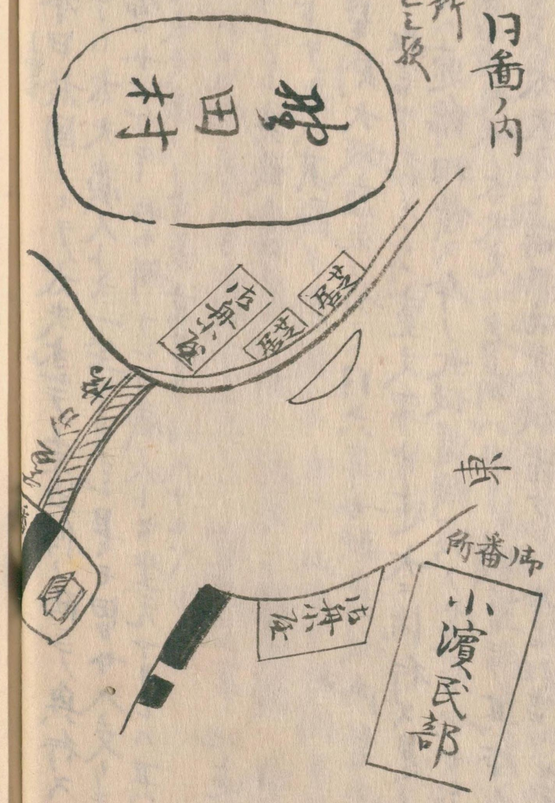
国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

延宝九年刊本大坂鑑

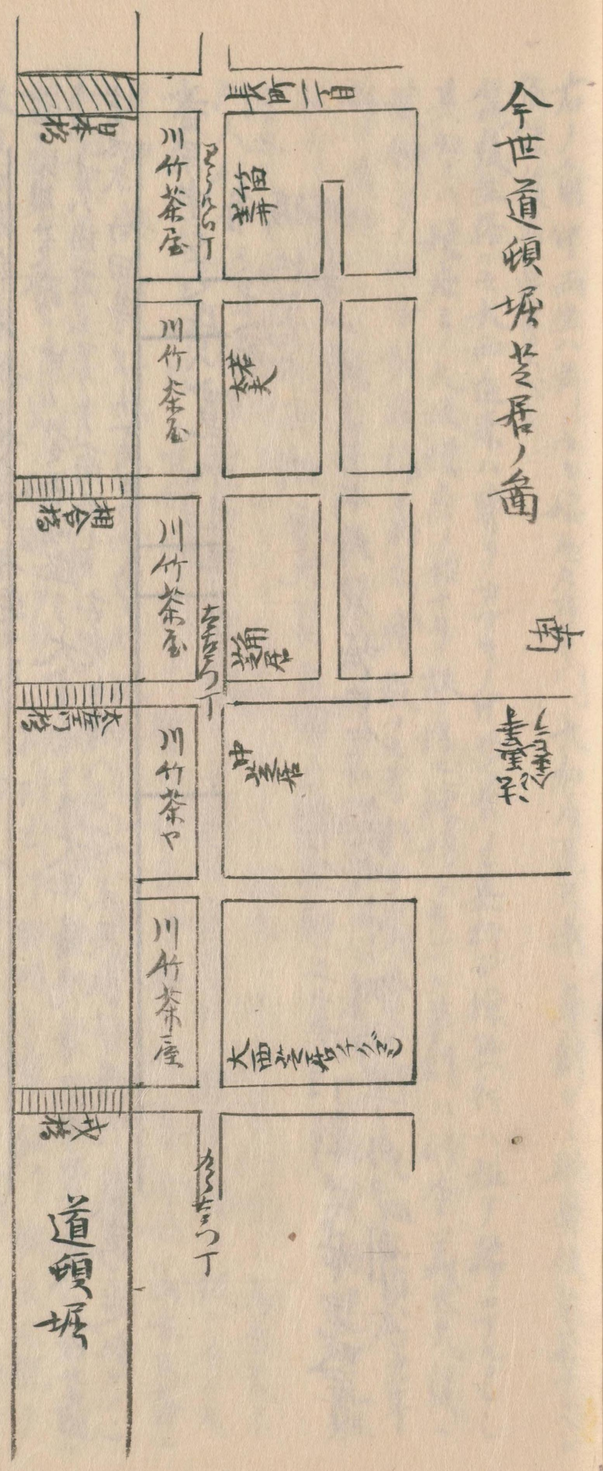
芝居三所アレ共其名詩カナラズ 操橋ノ南ナルハ今ノ筑後坐ナルベシ 橋モ今ハ我橋トモ何年改名歟 新中橋今ハ相合橋トモ是ニ近キハ今也角九芝居歟太左門橋南ナルハ今ノ角芝居ナラン




安治川口ニモ芝居二所アリ 此後何年ニ亡ビシ歟 又道頓堀ニ近ニテ後数座トナリシ歟 後考ヲ俟ベシ




今世道頓堀芝居ノ番



天保府命前ハ道頓堀今ノ如ク五所ノ他ニ曾根崎新地俗ニ北ノ一所柳巷ニアリ是ハ
大芝居ニ准スレハ其行ハ稀シ
其他堀江ニ荒木坐アリ文政始メニセヒ日所市ノ側芝居天保府命ニセヒ
又宮芝居トセヲ天満天神 声昊 座摩 博労稲荷 高津 等ノ社頭各一所アリ
其中博労イナリニハ二所アリテ南門内ノヲ文集ノ芝居トス多太夫操ノニ興行シテ
虚日ナリ大当セシ曾根サキ以下芝居天保府命ノ時廃ヲ今ハ道トシホリノ丸
婚ノミトナル安政五年諸社仏寺ノ芝居復故ノ官許アリ
又先年ハ角芝居ト若太夫ノ同ニ一座アリ以上六座シ此一座ヲ角九芝居トス 文政十年
正月火災後廃絶トナリヲ再建セズ
右ノ角芝居中ノ芝居両座ヲ大芝居トス大西角九等ヲ中芝居又ハ演芝居
トス古ハ川岸ニアリテ南西ト古老ス傳ヘタレ未其証ヲ得ズ後考追記スベシ
若太夫竹田等ヲ小芝居トス

弐八日 中之芝居ハ寛永元年草創
角之芝居ハ
堀江荒木坐明暦元年 市之側坐日三年 日新芝居寛政年
始レトモ此新芝居何所歟堀江今ハ荒木市ノ側西坐ノ外ヲ用ズ

弐日 寛永二年

右ノ角中両坐ハ前ニ云ル塩屋九郎左門 大和屋甚兵衛ノ草創セシ歌舞伎芝居ナルベシ
猶此後考追書スベシ
筑後坐俗ニ云大西迫来ハ東ラカヂキノ中芝居ニ興行シ操興行ハ極テ稀ニアルノミシ
其始ハ操座ニテ大坂操座ノ始ナリ故ニ移セ操移トモシ草創ハ竹本義太夫後ニ
受領シテ竹本筑後掾藤原博教ナル者則チ義太夫節ノ元祖ト貞享三年
始テ道頓ボリニ操芝居ヲ興行ス其時ハ未義太夫トモ元禄十四年受領セシガ元祖
故今ニ筑後ノ芝居トモ大西トモハ五所ノ極西ナル故ノ字ナシ
若太夫芝居是亦迫来ナカヂキヲ東トスレトモ元ハ操坐シ本名豊竹坐シ義太夫ノ
門人竹本采女後改名豊竹若太夫トモ元禄中主慶所ニ操坐ヲ用ル故ニ名トス
享保三年上野掾ニ受領日ナハ年豊竹越前少掾ト再受ス今世義太夫節ニ
東西二流ト別シ竹本流ヲ西豊竹流ヲ東トモハ其坐ノ東西ニアルカ故シ
竹田坐是モ迫来ナカヂキヲ東トスレトモ元ハ操坐シ紀人ハ操人形ノ細工人ニシテ浅
草観音ニ稽リ小児ノ砂遊ヒヲ見テ砂時計ヲ発明シ京ニ飯リ機関木偶ヲ
造リ元治元年細工人形ヲ大内ニ献シ始テ竹田迫ニ掾ト再任シ木偶自ラ種々ノ働キヲ
道頓ボリニ機関芝居ヲ興行シ竹田迫ニ掾ト受領シ寛文二年
名人等不可思議ノ巧ヲナセリ今ニ至リ人口ニ炙傳フ

又寛保中佐渡島長五郎坐ト圓十郎上リシテ弐書ニ云リ此芝居何処ニ在シカ未考

後者系譜トス書ニ所載

嵐三右衛門
大坂太夫元

摂津ケ崎ノ浪士西崎新平ノ男始テ後者トナリ小夜嵐二世

初名門三郎
大坂太夫元

一三右エ門

ノ狂言大当リヨリ移之人嵐ト号ス後自ラ西崎ヲ改メ嵐ヲ氏トス是三都嵐氏ノ祖シ
元禄三年十月十八日死六十八
法名山風寿昭

三世
三右エ門
初名新平
以上三世大坂太夫元

四世
三右エ門
養子初名松之亟

今世ノ嵐三右エ門三ノ七世シ

日書所載

岩井半四郎
大坂太夫元

号梅我
元禄八年三月二日死
法名浄春日笑

半貞日
存両太夫元ハ角中両坐ナル歟
後考スベシ

一世
半四郎
初名亀松
太夫元

二世
半四郎
初名八十三郎
太夫元

三世
半四郎
初名竹蔵
太夫元

四世
半四郎
初名松之助
天保中死

女
山下金作妻

右三人是オノ〻元父ニ四代ノ太夫元シ

五世半四郎
号梅我初名桑三郎
天保七年死三十八
初名松之助
天保中死

六世半四郎
号梅我初名桑三郎
後改紫若

七世半四郎
号紫若
今名桑三郎

八世
号菊
今名桑三郎

五世半四郎号梅若
文化四年死六十八
江戸ノ四代ニ世形シ
五世半四郎
四世半四郎
梅我ノ男シ

大坂ニ是古画未見ズ進テ得ズテ加筆スベシ蓋シ京師ト異ナル歟
又今世ノ画能考正ニテ左ニ画セント欲ス

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』請求記号 寄別13-41
ガラス使用

以下十年ノ間 傳聞シタル所ニ過ギズ 故ニ此書ハ文政ヨリ前ノ事ハ
文政ヨリ後ノ事ハ 見聞シタル所ニ過ギズ 故ニ此書ハ文政ヨリ前ノ事ハ

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41

がうス使用

北表

| 十二 | 十一 | 拾 | 九 | 八 | 七 | 六 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | |

| | 東出 | 東孫 | 東彦 | 東鶴 | 東亀 | 東玉 | 入花道 | 藏 | 道花 | 櫻 | 梅 | 竹 | 杏 | 川 | 山 | 玉 | 亀 | 鶴 | 彦 | カヨリミチ | 孫 | 出 | キミツカ | 戸数 | 一本 | 二 | 三 | 四 | 五 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

舞臺

京都大学人文科学研究所

大坂劇場全書追考スベシ先右ニ観席ノミヲ商フ東西桟敷ハ二階アリテ二階ヲ
上ヲサヒキ下ヲヨタサヒキトモ江戸ニテハウツラトモシ下桟ヒキヨリ一段ヒキク平場ヨリハ二
高ク下サヒキノ前一行ヲ「出」トモ江戸ノ高土間ト同制シ東西ニ在テ東西孫印
ヨリ孫号ニ至中間ヲ場トモ平場ノ畧シ江戸ニテハ土間トモシ江戸ノ土間ハ簾廣
ク土間数廿シ大坂ハ狭ク場数多シ東西ノ横ニハ孫彦等ノ名目ヲ付ケ南北
ハ舞臺際ヲ俗ニカブリツキ次ヲ新一其次ヲ本一トモ夫ヨリ二三四ト号シ十二ヲ二
北ル場名ヲ奇又ハ帳面ニ記ス著壁ハ新一ノ鶴茶屋誰彦ノ七某ト記ス他准之
其土間簾縦横ニ高サ三尺余ニ角材ヲ掛渡セリ横ハ長材ヲ渡シ竪ハ短リ横材ニ
掛ル二間物二間物トモヲ多人数ニ辭時ハ幾場ヲモ一席トスル其時竪材ヲ除キ幾席ニテ
モ横通ニスル江戸ハ竪ヲ長材トスル故ニ数席ヲ合ス時ハ竪ヲ通合ス此簾ヲ仕切トモ出ト
桟敷ハ大坂トテモ竪ニ合席スルシ
大坂大芝居ノ場ノ仕切総横桁ノ下ハ空シ江戸ハ横桁下ハ空ナシ竪桁ノ下ハ板一枚ヲ
横ニ打テ隔トス
カブリ付ノ入ハ乃チ舞臺ト花道ノ隅シ爰ハ観席ニ非ズ往言ニヨリ井戸ヲ用フ
ル時ハ此所ニ井桁ヲ置キ常ニハ舞臺ト均シクノ板ヲ以テ塞ク即チ井
字ヲ記セリ江戸ニハ井戸ヲ舞臺中時ニ慮ニテ造ク

上桟敷
下桟敷

観席ノ桁ヲ上京坂ニテハ桟敷代式ハ場代ト云其價上孫ニハ定價
アリテ上桟敷銀二十匁下桟敷銀十九匁場銭一貫三百文ト
ハ観者ニ幕ルニハ席品ノ上下ト時ノ盛衰トニヨリテ増減スルナリ
大畧上下桟敷銀六十匁ハ一席ノ上下ト二三四貫文場ノ二三四貫文ヨリ
桟敷出場ハ二三四五ヲ上席トシ上サヒキ上バトモ新本ノ一ト二匁ヒ
六七等ヲ中トシ以九以下ヲ下トス又西ヲ上トシ東ヲ下トス是畧北面
故ニ
江戸ニテハ二階ヲサヒキトモ京坂ノ下サヒキヲウツラトモ生ヲ高
土間トモ場ヲ土間トモ又ハ是畧南面故ニ東ヲ熟表西ヲウ
ラトス
京坂ニテ場トモハ平場ノ上畧ナルベシ
大坂芝居舞臺際ヲカブリ付トモ其次ヲ一トモシガ近世カブ
リ付ノ次ニ新一ヲ用キシ故ニ先ノヲ本一トステ席数ヲ増リ
京坂ハ平場ノ数江戸ノ土間ヨリ数甚タ多シ加之其價モ
賤カラズ例ヘバ一日収金百ニ三十両大坂芝居ハ得ル
京ハ一日百八九十両収ル所其行師ニテ費多キカ故ニ催主ニ
得ル所却テ大坂ニ及バズ

戯場ハ三都共ニ周正ヲ用フルカ如シ十月晦日ヨリ顔見世トス昔ハ明年中其生ヲ勤ル
ノ俳優如ニテ今日ヨリ其生ニ抱ハ是ヲ観者ニ披露スルヲ顔見世ト今世ハ顔見
世ノ時当生アリ早春ヨリ他生ニ出ル者其臨雑シ
芝居顔見世トハ十一月朔日ヨリ十日ノ間ヲ定日ト大芝居迎世興行ハ興行式ハ遅日ヲ

参ス 高坂顔見世一夜一日シ 昨日 今日ノ観者 黄昏退散ス 直ニ今日ノ観者ヲ集メ先ヲ争フ
ト目ヲ上下 俳優 舞台ニ列坐下 輩ヲ書ノ縁ニ出テ自ラ其名ヲ名乗リ
吾幼ク称ス 流何某ト申ス不調法者 偶カラ 如此雑支 合集ニ出ス

甲子ノ年 十月十五日 免

江戸歌舞伎芝居於国興行ノ後今ノ中橋辺ニ此類ノ場ヲ建シト伝聞其
詳カナルヲ知ラズ其内今ニ相傳スル者ノミヲ左ニ記ス
寛永元年 猿若勘三郎 始テ 官許ヲ得テ 中橋ニ櫓ヲ上ル 蓋仮屋作シ
今ノ如キ芝居
同 九年 猿屋町 今人ニ迄之
同 十年 村山又三郎 昔屋町ニ芝居ヲ開キ櫓ヲ上ル後ニ市村坐トナ
リテ今ニ至ル

三年 慶安四年 猿若坐ヲ堺町ニ迄ス 猿若則今ノ中村坐也 堺町フキヤ町ト
並ビ隣ル故ニ二丁街ノ芝居トス其他数坐アリ左衽ノ如シ
承應元年 若衆歌舞伎ヲ 官禁アルニヨリ前髪ヲ刑リ除ク
元和以前ハ女俳優ヲ交ヘ遊女等専ラ行ル也 此ニ壮士等其色ニ
誤ヒ騒動スル故ニ女俳優ヲ 官禁アリ是ヲ和ヒ中ノ頃ニ其後若衆
ヲ俳優トス若衆ハ美少年ノ俗語ニ美少年ヲ女形ニ仕立俳優ス
ルニ又士民興行男色行レテ負声甚ヒキ故ニ再 禁ル夫ヨリ前髪
ヲ刑リ頭帽子ヲ以テ覆ヒ女形ニ其後今ノカツラヲ用テ男女場
ヲナスシ
昔ハ優美ヲ好ム故ニ婦女モ美少年ヲ愛セシ今モ上處女ハ美少年ヲ
モ愛スベケレ倡妓及ヒ市民武家ノ婦女ニ美ニシテ侠気アルヲ好ム
千本櫻ノ狂言ニテモ惟盛弥助ノ及ビ小金吾ヨリハ イザヨノ權太ヲ愛入ベシ
餘モ准ヘシ
承應比ハ傾城買ニ通フ所ヲ為テ狂言スル一事ヲ行ル 当時ハ續キ狂言
ヲ一段限リシ又用ノ調度ノミヲ大道具モ用ヒズ
式書曰 承應三年 始テ女カツラヲ用ヒ又当時島原通ノ状ヲナスヲ行ル

雜劇ノ異名ヲ島原ト云ヒ似タリトシ日時ニ小唄三絃ノ藝人ヲ京師ヨリ江戸ニ呼迎ヘ用ヒ

万治三年 森田太郎兵衛改名勘作 木挽町ニ芝居ヲ創ス 今ノ川原崎座ハ是ヲ續ル者ニ 今ニ至リ中村 市村 ハ万治中市村座ニテ大道具ト号シ狂言ニ座ノ芝居ト云ヒ 能舞台泉屋ヲ模造シ引幕ヲ用ヒ續狂言トスルニ一事ヲ二ニ段式ハ終日ニ至ル ヲヲ始メ自称 惣踊 續狂言ヲ行ヒ 遠ニ二坐ニ行ク 京坂モ学ヒ始ル 式ハ是ヨリ 上京坂サキニ 續狂言スル故ノ起考ヘベシ

寛文三年 俳優ノ役 唐織ヲ着シ及ヒ馬加馬ニノルヲ禁止シ 又昔屋町川岸ニ在リシ一文茶屋ヲ禁止

市村坐大道具續狂言大芝居ノ始メ 中村坐ハ同六年ニ始ト云ヒ此時元祖市川團十郎十四歳ニテ荒事ヲストシ

延宝 二年木挽町 山村坐ニテ始テ曽我狂言ヲ 山村坐後ニ絶アリテ再興魯助氏 寛文四年ニ始メ中村坐 古永禄中 生島ノ於国ヲ足利家ヨリ召テ 狂言ニ此時ニ曽我狂言ヲ行フ 或書ニ云フ カヅキニ曽我ヲ行フ 云々

延宝八年市川團十郎 不破伴左ニ移シ 村山四郎次山ニ 村山坐ニテ行ヒ 此狂言ノ始メニ外題 遊女節ト云ヒ

元禄四年 水木辰之助ト云女形ノ 鈴踊ノ所作大当リス 同十三年 同人 七変化ノ所作ス是ヨリ七変化ノ始メ

本挽町 山村長太夫

正徳四年二月八日山村座断絶 生島新五郎ト共ニ役者 奥ヲ中ニ 生島ト通ス 流罪トナル 長太夫モ流刑

宝永九年 江戸ニ芝居相伝シ 官ニ請テ芝居小屋ヲ瓦葺キ 四面塗籠メ製トス 十古来ハ茅葺ニテ 今製四瓦葺ナリ 四面ヲ塗ヲメスト雖ト 表ヲ々千上ヲ瓦置ニ横ノ ハヌリヲメノ遺意シトソ

寛政五年 生永天明比迄ハ立役女形 実悪道外 若衆形 親父形 敵役 花車形 茅会シ 真主役ノモノ藝ヲ勤メシ 世形名人中村富十郎 木挽町ニテ立役ノスル 工ル藝 初経ニ移シ 市ヲ立役中村仲蔵ヲ女形ノ忍壽トナリ 改東ニ津五郎ガ道外役ノ大郎トモ役ヲ勤メシヨリ 今ニ至リ 往々主役ニ非ザル他藝ヲ勤ル 有ル

天明四年 市村坐休ニ代ル 桐長桐ト云者 桐坐トヨシ 五年行ヒ 同八年ニ 市村坐ニ復シ 式人曰元祖中巻ニ云太夫中興大内蔵 中興ニ云ハ長相 犬相 坂相 相大内蔵 千相 相氏ノ家譜ニ 寛政五年ヨリ 十年迄 又桐坐トナリ 十年ヨリ 今ニ至リ 市村坐 天明八年ヨリ 表田坐休シ 同八年ヨリ 十年ヨリ 寛政五年ヨリ 中村坐ニ復シ 同十二年ヨリ 今ニ至リ 河原崎坐 寛政九年 本田ニ復シ 今ニ至シ

天保十二年 二十街火災後再建ス 出家下部跡ニ 日九年ヨリ 中村坐ニ復シ 名ヲ猿若町ト 給ヒタリ 林挽町ニ 浅草ニ迄シ町 当時 昔金ノ有レバシ 又日時 市川七世團十郎 改名海老蔵 奢侈 暦上ノ罪ニテ追放セラル 成田ニ往キ 後大坂ニ至リテ

狂言ニ出シ日時大坂ニテモ女形中村富十郎モ奢侈ノ咎メニテ
追放セラレ堺ニ往キ狂言ニ出シ
弘化比八代目團十郎ノ父ノ赦免ヲ神仏ニ祈リ其他行跡
宜シカラザリシヲ官ヨリ褒美銭ヲ給フ
嘉永七年右八代目團十郎大坂ニ往キ自害スル父ノ毒
殺者ノ所為ニヨルシ見届ケ多キ者故死後遠ク宵
像国ニ四十日繪店ニ黄シ古来役者ノ死国ハ二三種ニ限
リ八代目ノ如ク又存生ノ時ヨリ八代目トシテ異者ノ
如クニ十ヒリ
嘉永七年十一月六日山ノ宿ヨリ火アリテ二坐ヒニ焼ル迄地後始メ
大笑シ明春三坐ヒニ再造ス



目録

寛文古畫帳所蔵所之居畫　浮世絵ノ正伝業
貞享年中同所之居畫　世俗ニ之を俗ニ謂フ所ノ
江戸浄瑠璃ノ始メ六ツ　巻末ノ所録
和泉太夫四巻　吉門掾四巻　土佐掾四巻　宇治正掾　又貞掾四巻
同掾之居絵巻　和歌浦　巻末所録
土佐掾　天満八幡宮　又貞掾　和泉太夫　宇治太掾　宇治太夫　江戸孫四郎
樂屋の図　世話ノ歌舞業　歌舞伎　有名の十八番などいろんどもちろふ浦ぜり

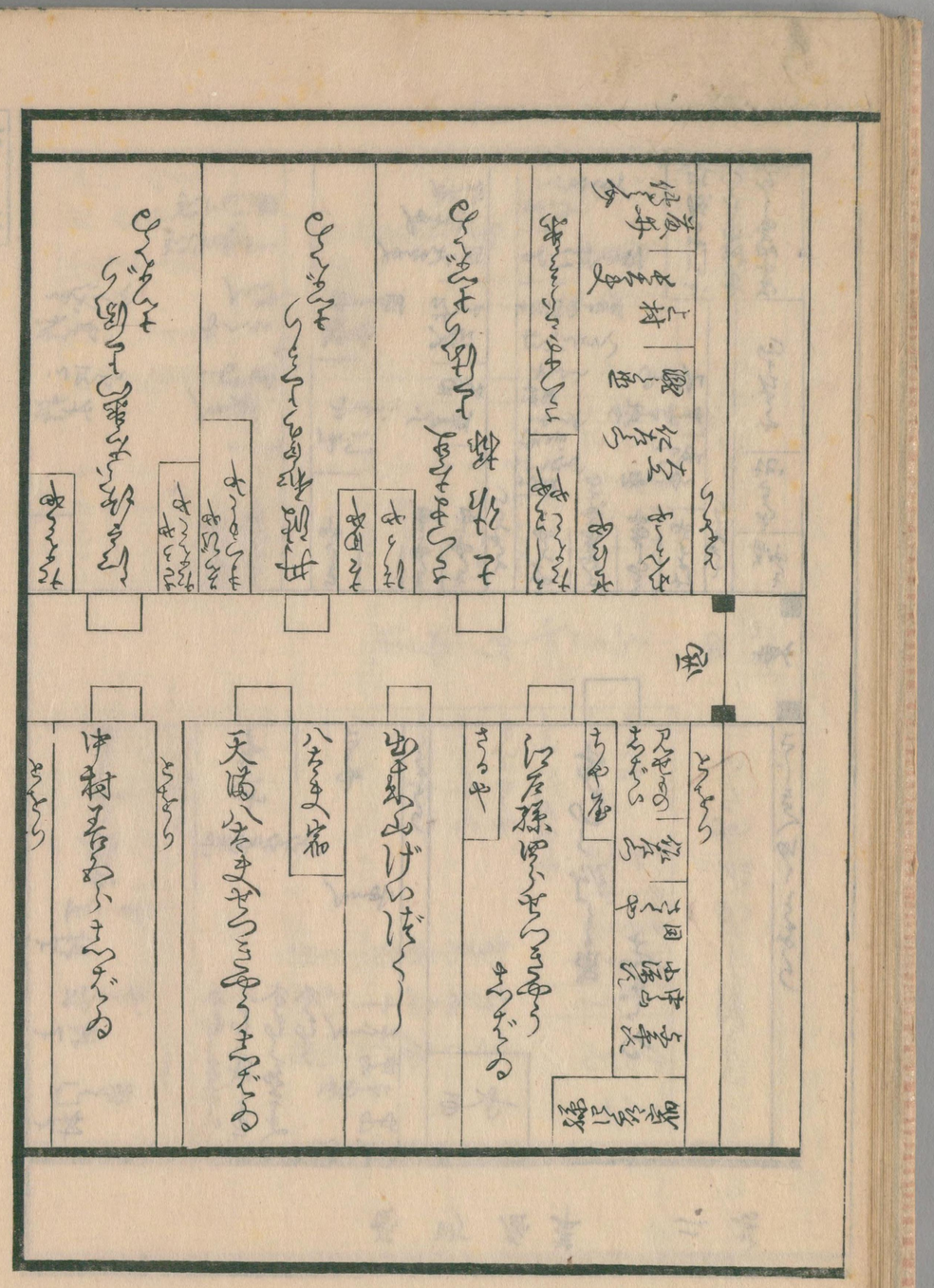
以上

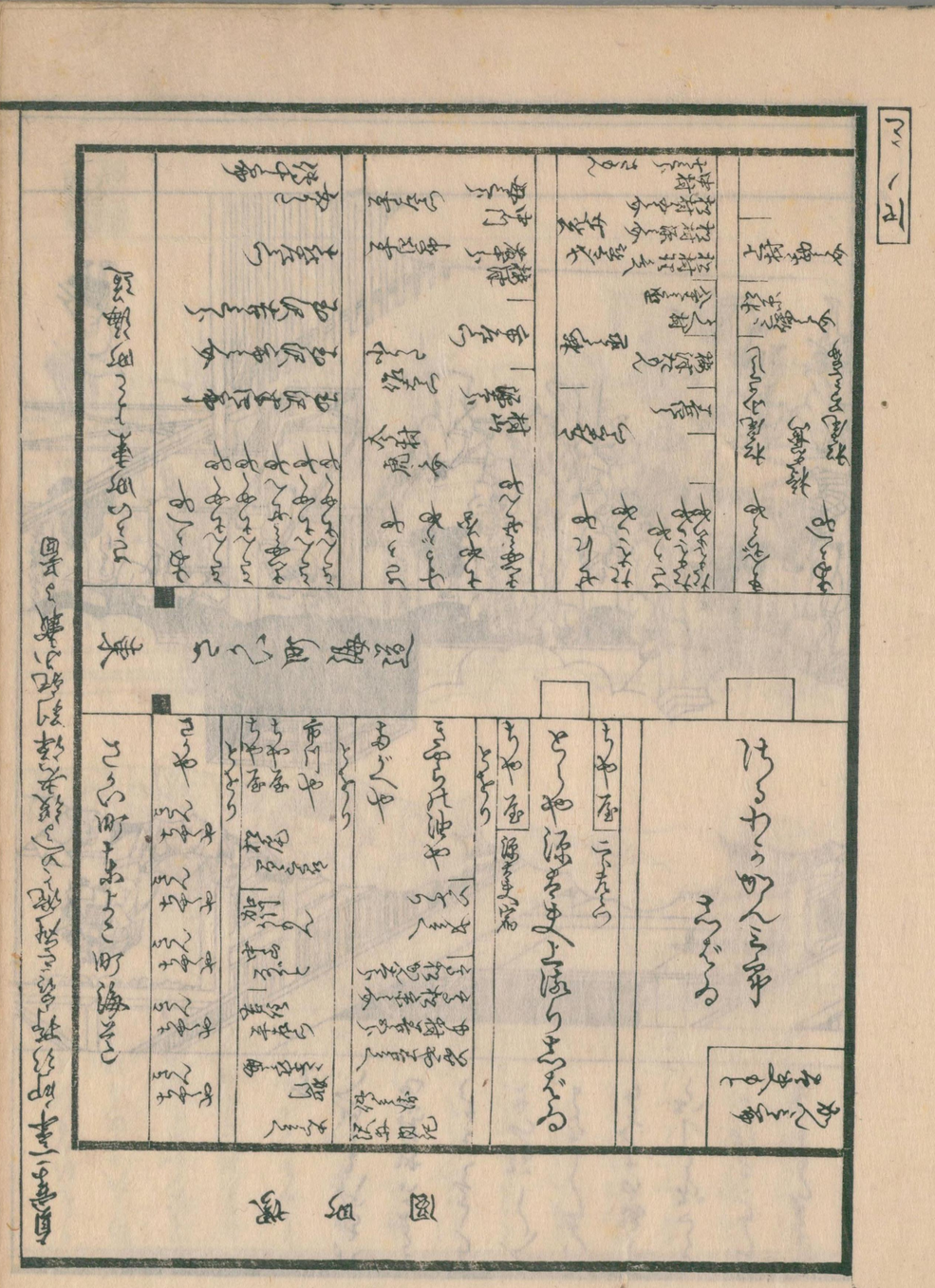
天下一
丹波屋
平正信

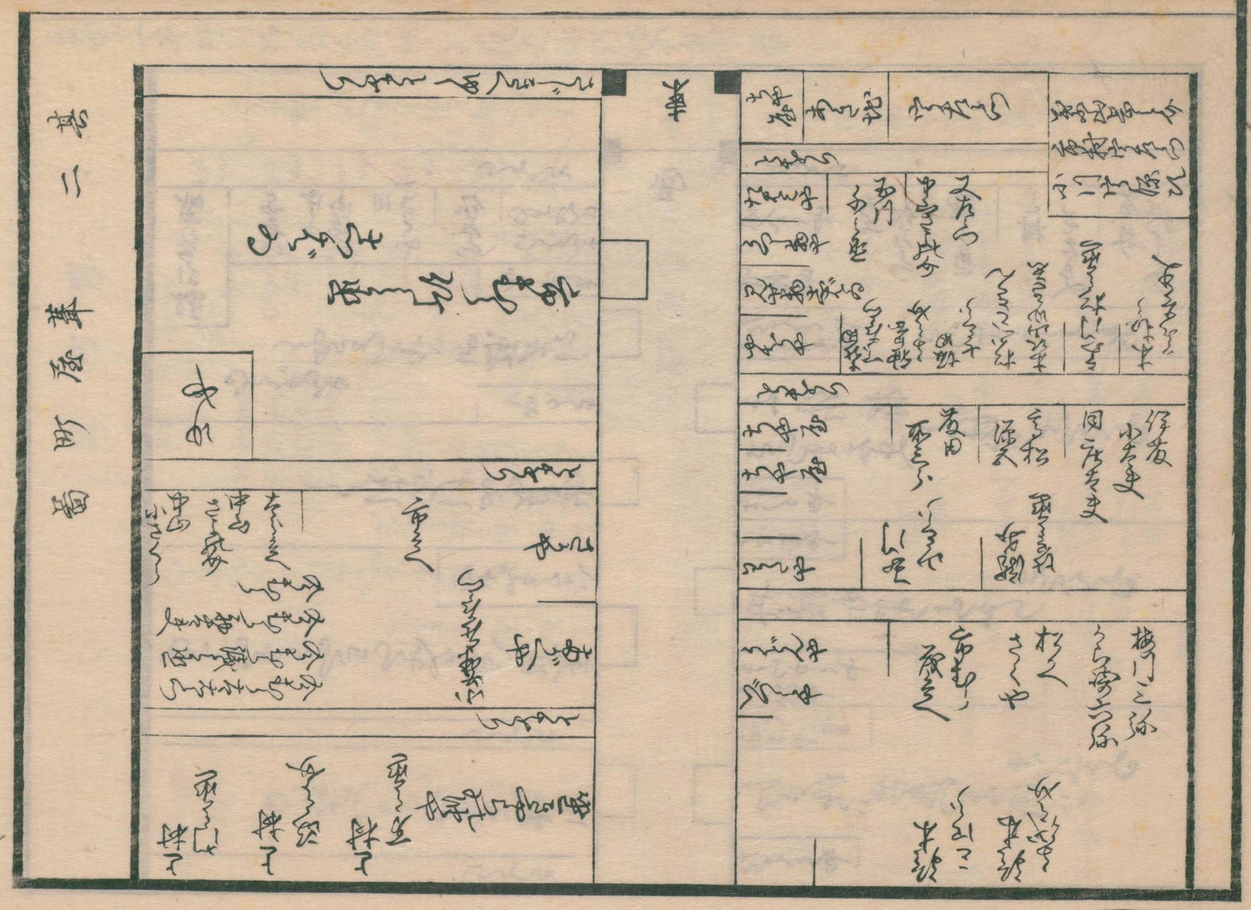
天下一

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

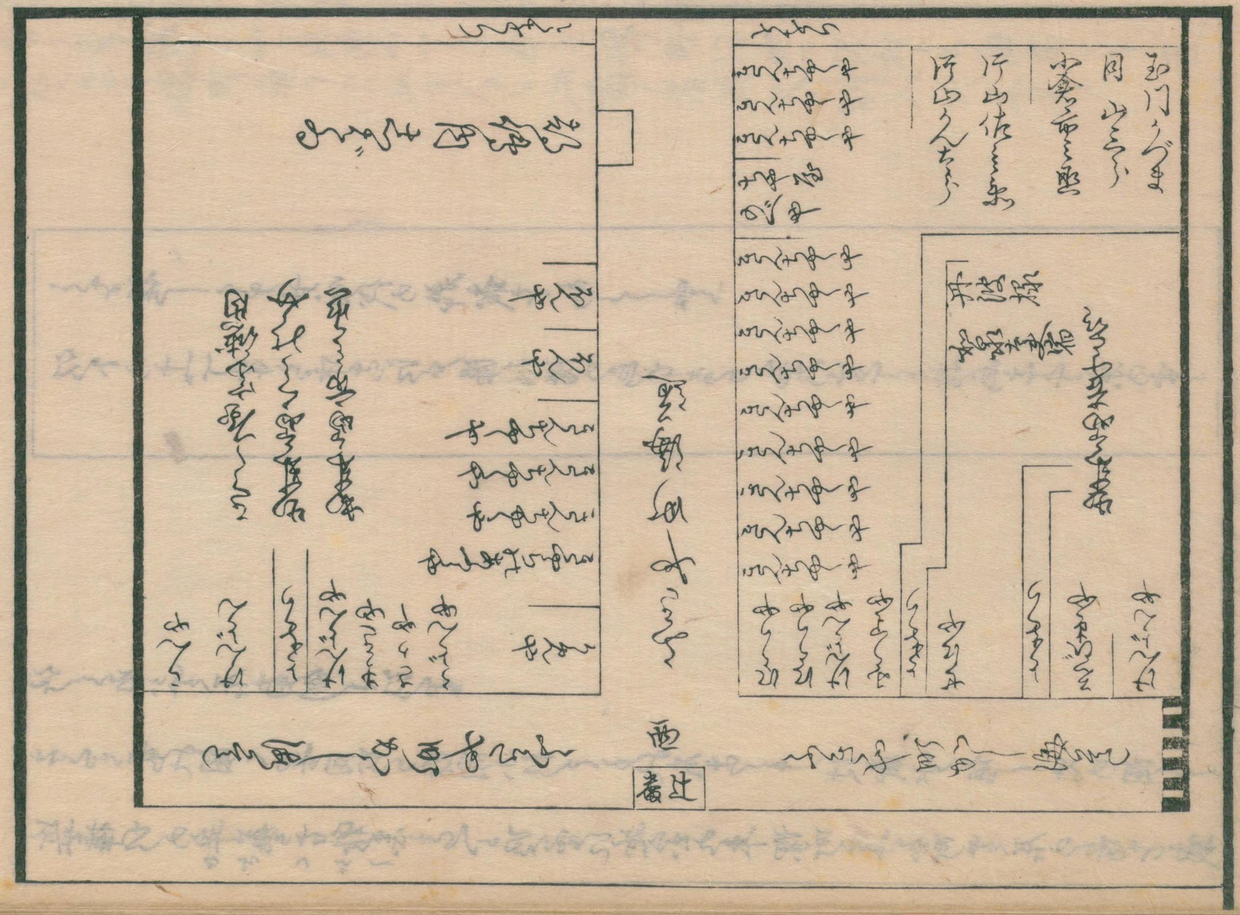
国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用










国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用

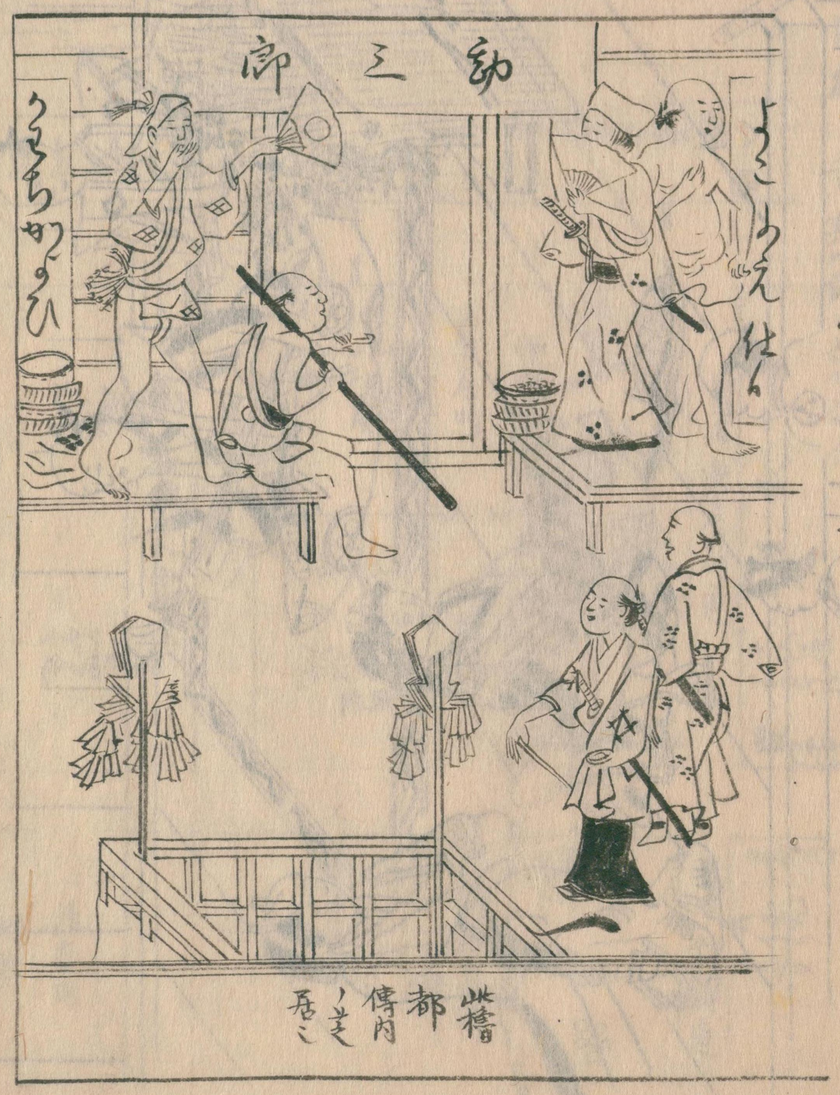
近世捧げの年表古雅志ものゝ記せし処実に年際所尊所居の畫を載
せたれども異図に異図なり坊間に刊行せるものは載せず但し太の図も
作るべきなり居南例に記す

以下の十二丁まで中古江戸浮世絵の面白きもの抜萃して其時代の雅趣を知るべし



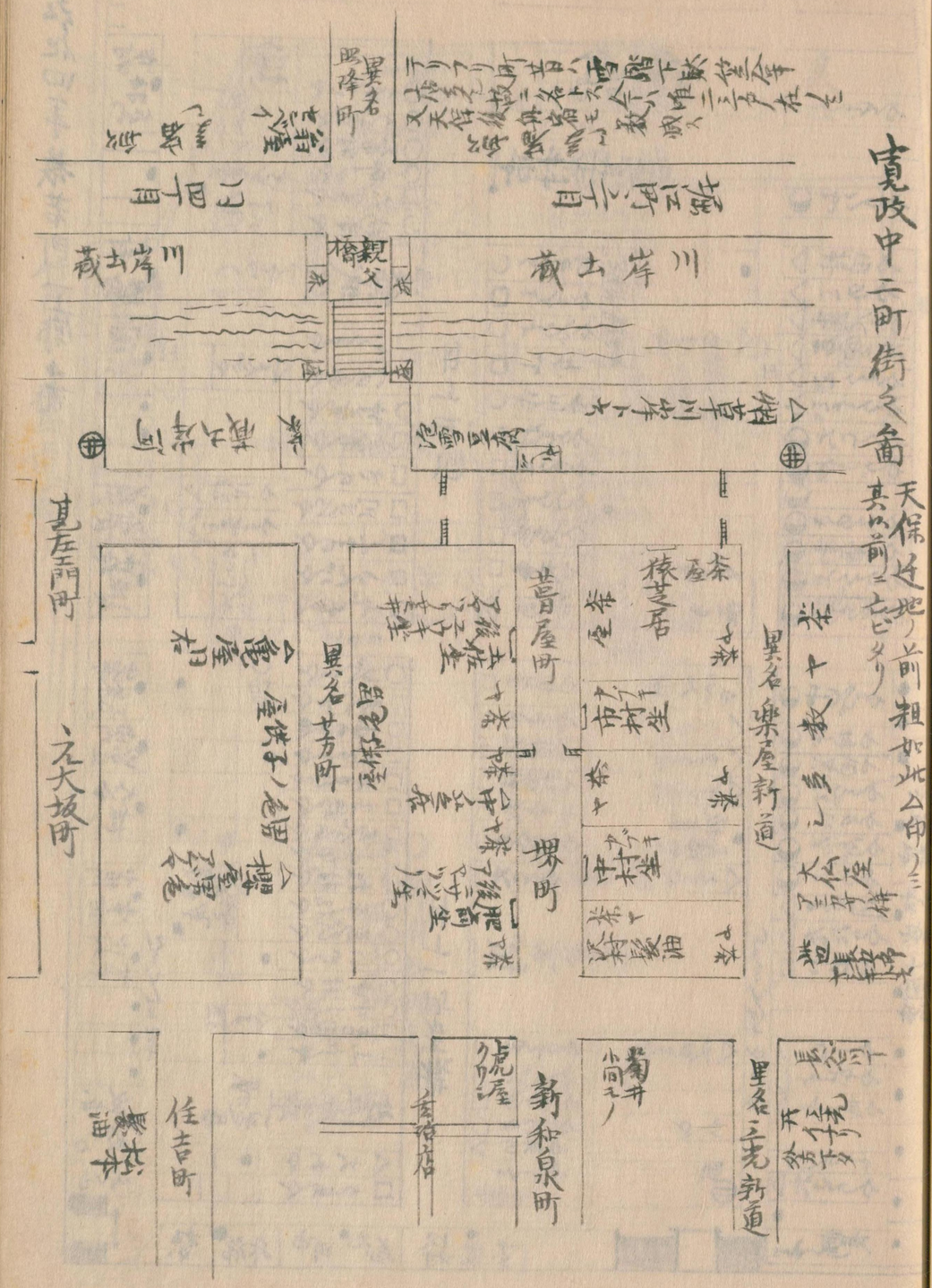
右ノ畫ニ海道トアルハ街道ノ假字ニテ ちとりハ今ノロジシ露路ナリ又畫中
さんちやくやトセモノ甚多シ中著店ニハアルベカラズ茶屋ノ類歟ト見ルニ別ニ考ヘ
アリ中著店ヲ名目ニテ芝居楽内茶スルモノ歟能追考スベシ
源太夫芝居ノ東隣ニさやヲ比沙やアリ今モ堺町日地ニ沢村ト云油店アリ天
保ヨリ今ニ在スル者堺町通リニハ此一戸ノミ此畫ノ者歟又ハ別人歟未考

寛文延寶頃　江戸劇場　木戸之番

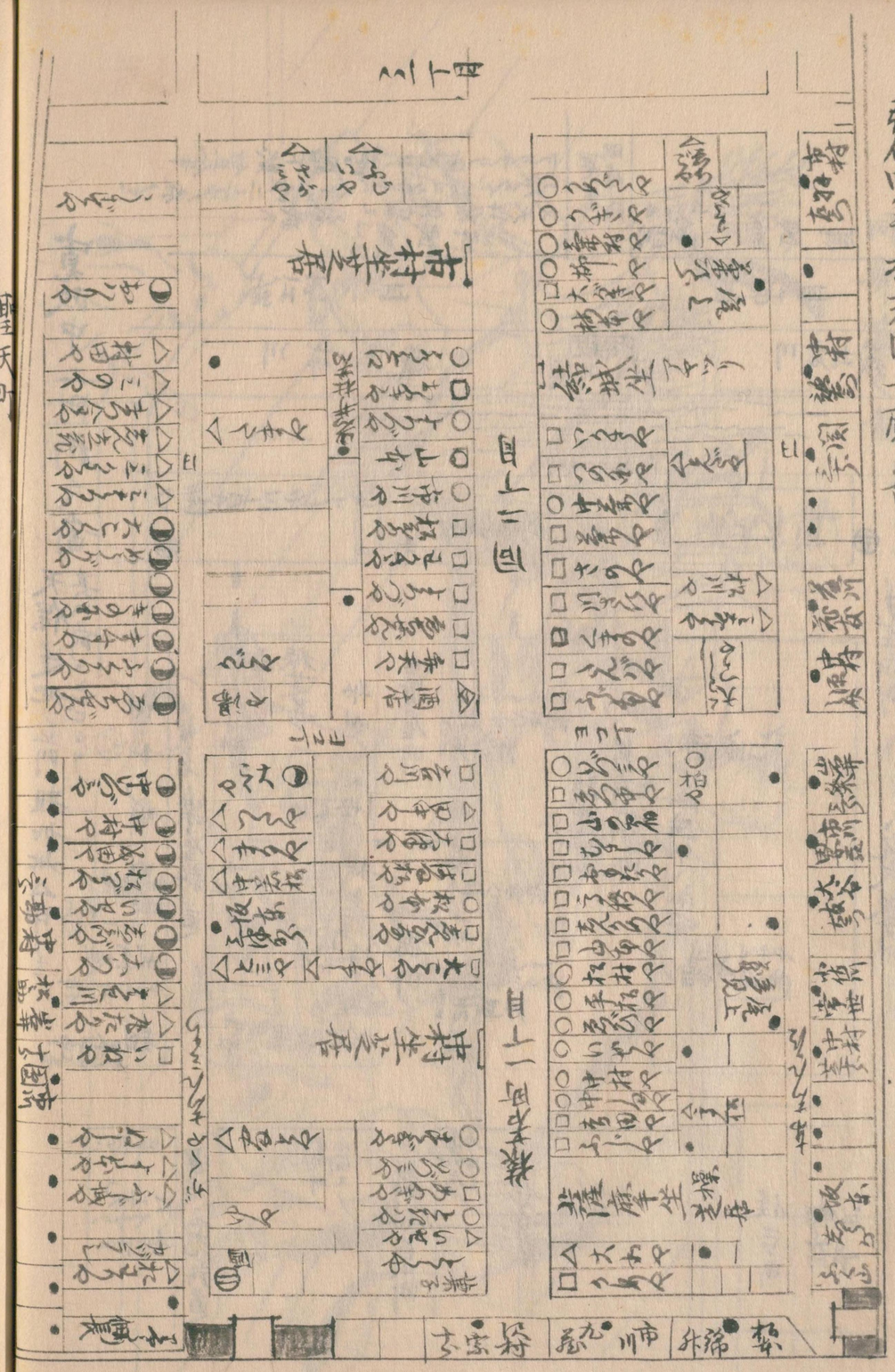



国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41　ガラス使用

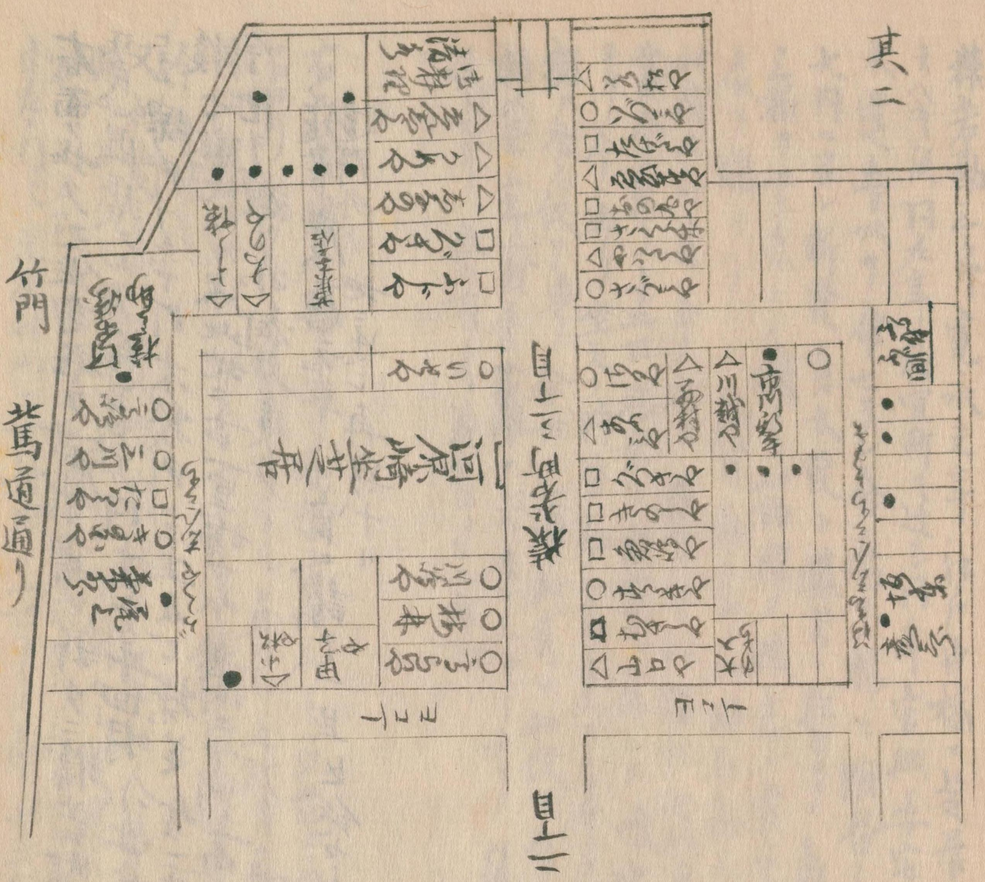
同舞臺之畫　是乃チ河内通ノ狂言ニ高安通ヒ云



弘化四年 横若町一廓画




其二




○ 檜付料理茶屋
◐ 同 両芝居 十六軒
□ 同 三十六軒
△ 同 五十八軒

● 役者宅

右番ノ如ク三坐芝居ヲ一廓ニ集メ新タニ猿若町ト号ス天保庚申ノ時役役
民ニ混居ス可ラス因テ十三年四月小出家下邸跡ノ地一万七十八坪ヲ給
与シ堺町ヲキヤ町太鼓町ニ坐及ビ操芝居ニ坐ス移転所シ操座ハ其
後七絶セリ又此地ニ古一里塚アリ五間二十間高一丈餘シ又焼ヲ地ノ旧地アリ
今地ヲ但テ小祠ヲ建ツ

追書 慶應元年 官ニ請テ一旦ニ絶セシ両操坐ヲ両国米澤町ト節
遠門外ノ地ニ迁シ再興ナル

猿若勘三郎 寛永元年江戸中橋ニ芝居ヲ創ス是歌舞伎坐ノ祖ナ
リ八年後日九年移宜所ニ迁シ日年官舩安宅丸伊豆ヨリ漕スノ日勘三郎ニ
木遣音頭ヲ命セラレ金麾ヲ賜ヒ明暦三年上京子息ト共ニ
大内ニ召シ新發意太鼓ト猿若ノ狂言ヲ叡覧ニ備フ其時麹町中ニ
三箱ヲ紫糸ニテ綉ル鉛摺ノ猿若ノ装束ヲ賜ヒ又子息ニ明石ト
名ヲ賜フ二ヨリ二代目勘三郎ハ明石勘三郎ト号ス四代目隠居後中
村傳九郎ト称ス五六代目猿若中村亜称ス七代目ヨリ中村ヲ専称トスル後
蓋今ニ至リ十二世猿若ト称セザルニ非レトモ唯中村ヲ専用ス九代ヘシ初代
ヨリ今ニ至リ坐元ノ時皆勘三郎ヲ名トス七代目後ニ傳九郎ト改名シ
鶴ノ巻ノ役ヲ用ル今世ニ三浦義秀ニ此役ヲ付ケハ傳九郎ト称シ以来ノ例シ
朝比奈ニ市川義秀ニ帰ス十九ハ巻ニ三ツ川ヲ
役トスルヲ往々有ル義秀ノミニ非ス 後世俳優ノ役ヲ誇ヲ越人ノ

右二代目明石勘三郎ノ弟子市村竹之丞芝居ヲ創ス其時明
石ヨリ鶴ノ巻ノ役ヲ分ケトシ無ラハ七代目勘三郎ヨリ此役ヲ用ヒシニモ
非ス往来此役ヲ用ヒシナリシハ八段ノ内ニ銀杏ハ勘三郎累世ノ本役ナルヘシ
今専用ス
又村山又三郎 京人或ハ泉堺人ナリ此人能ノ間狂言ヲ勤シ役者ヲ交ヘ
踊リヲ以テ無行ス是竹之丞創セシ芝居ナリ故ニ市村坐ハ村山又三郎ヲ元
祖トス又三郎ニ男ナシ故ニ村田九郎左衛門聟ナリ故相続ニ二世トス此子ハ市村
宇左衛門ト云フ 元祖村山二世村田二世ヨリ今十二代ニ至リ市村ヲ称ス

七代目菊五郎ヲ用ル

坂東三津五郎

今ノ猿若町三丁目ニ居ル所ハ元治元年ニ出田太郎兵衛ト木挽町ニ創ル二世
八坂東又左衛門ト称シ此時堺町ニ近キ所ニ元禄四年ノ頃ニ坂東又七
四代ニ来ル今九代ニ至ル出田勘弥ヲ名ノル蓋八代ニテ血統絶ヘテ芸者生ヲ
川原崎ニ頼ケル今ノ勘弥ハ三津五郎ヲ名ノル後改テ三津五郎ト云
近頃出田勘弥ノ屋名ヲ継グノミニ生ル二ハ非ズ
河原崎権之助モ慶安元年木挽町ニ芝居ヲ創シ其後出田ト合生
ノ興行ヲ行ヒ文化中八代勘弥ヨリ生ヲ頼リシトヲ此ハ今ノ河原
崎生ハ出田ノ跡トカニモ非ズ二生ヲ合ス者歟権之助元禄京師在瓦崎
トカ能太夫シ江戸ニ下リ芝居ヲ創スルノ時瓦ト河原和訓近キ故ニ
更ニ名ニ至リ六代十七代中絶等アリテ終ニ河原崎生昔ハ能芝居ヲ
河原崎生ノ次ニ六ハテ三隅芝居ノ次ニ合スベシ

猿若町壹丁目　嘉永七年江戸浮世絵師
廣重所筆　三枚ツヾキ錦絵ノ写
中村座面

左右ノ茶屋ト往来
男女畧之

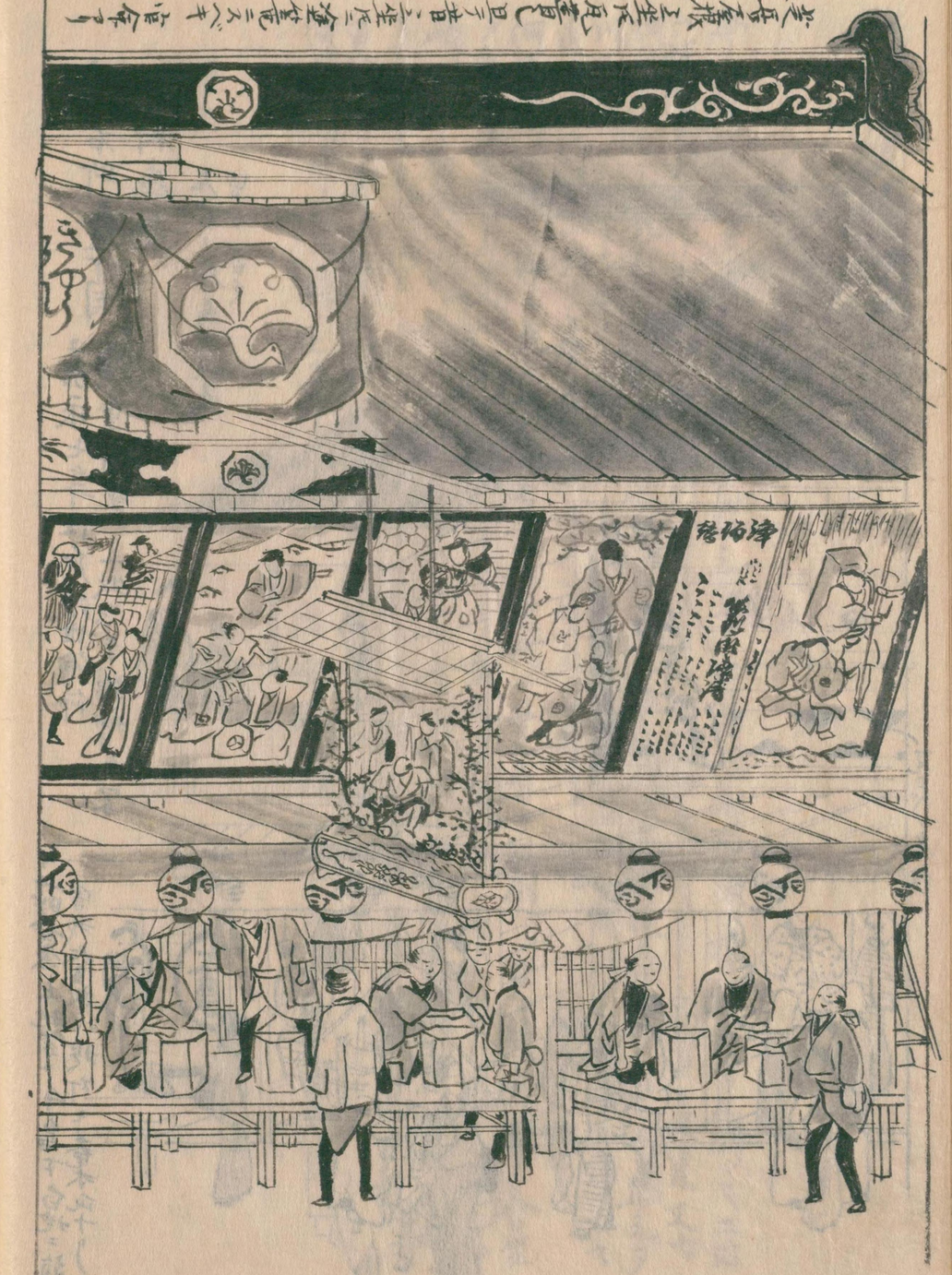
ワキ
狂言

酒天童子

瓦カベノ名残

「此度屋上地業ニ付鳥下白地ニ萌木蝶
皆我狂言故ノ提灯ニ書木瓜ナリ」

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

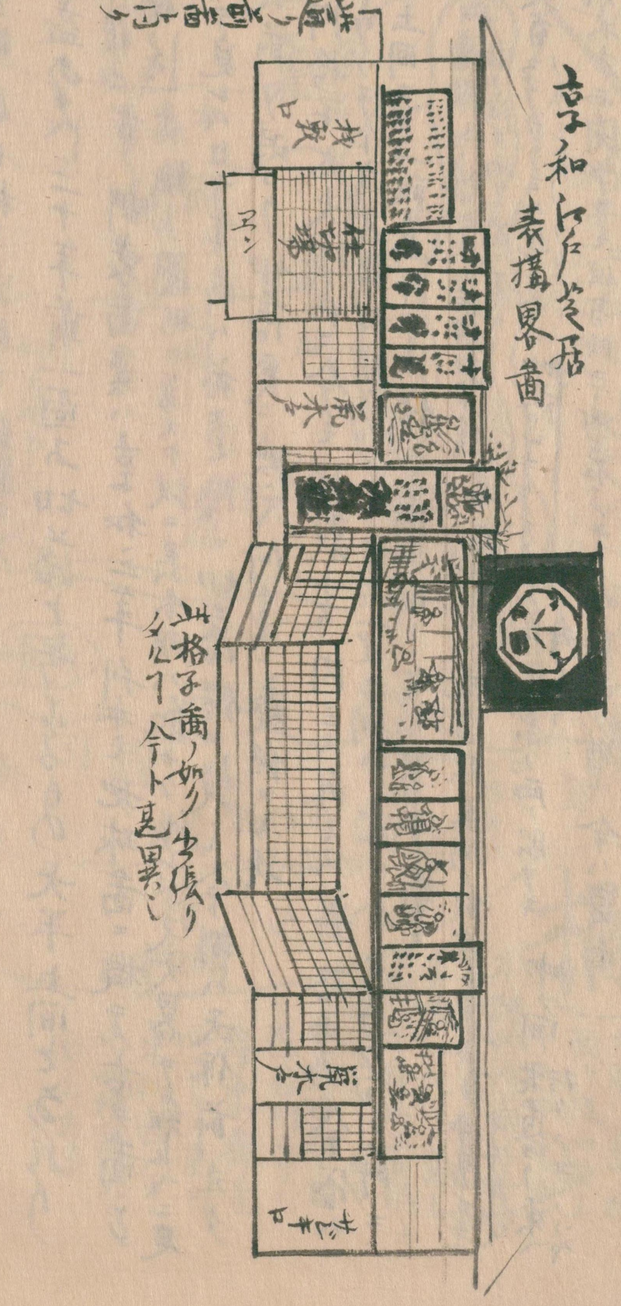
慶長年間江戸ニハ芝居ニ切落シ并中ノ間トテ舞臺際ヨリ鼠木戸ニテ追込ニシテ切落一人百三十二文中間一人百文ニテ見物ヲ入レタリ二三十年以来舞臺際ヘ土間サジキヲ拵ヘ残リハ切落シ中ノ間ニテ追込ニセシ処近頃ハ切落中ノ間更ニナシ残ラズ土間桟敷ニシタリ故ニ切落中ノ間トカヽヘノ絶タリ

右ノ書元文生ノ人ノ文化中ノ業記ニテ二三十年前トセハ安永天明ヲ指スベシ亦左ニ画ヲ寫ス訓蒙画彙ニヨレハ文化遠モ切落中ノ間僅ヲ存ス後先見ル何レ孜見ナル後考ヘベシ

# 勾

東桟敷
内格子
太夫
平
新格子
中村座市村坐方角如此本留坐休考時河原崎座の方角ハ南北に桟敷二ツ接ふ故ハ二町の東西ハ本桟町の南北し表方樂屋の格子ハ三方共に大引に異し但し本桟町ハ羅漢堂なし
北極
二楷
三楷
見附柱
稲荷町
大臣柱
本舞臺
羅漢臺
雨落
前土間
本土間
東花道
新土間
土間
本花道
切落
大首
中間
高塀
仕切塀
表木戸
追込
前桟敷
向桟敷
追込
檜南極
舞台
引
舞台
檜
舞台
桟敷
舞台
檜
舞台
桟敷
舞台
檜
舞台
桟敷

京和江戸芝居
表構畧畫




国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41
ガラス使用

今世江戸歌舞伎坐之畫

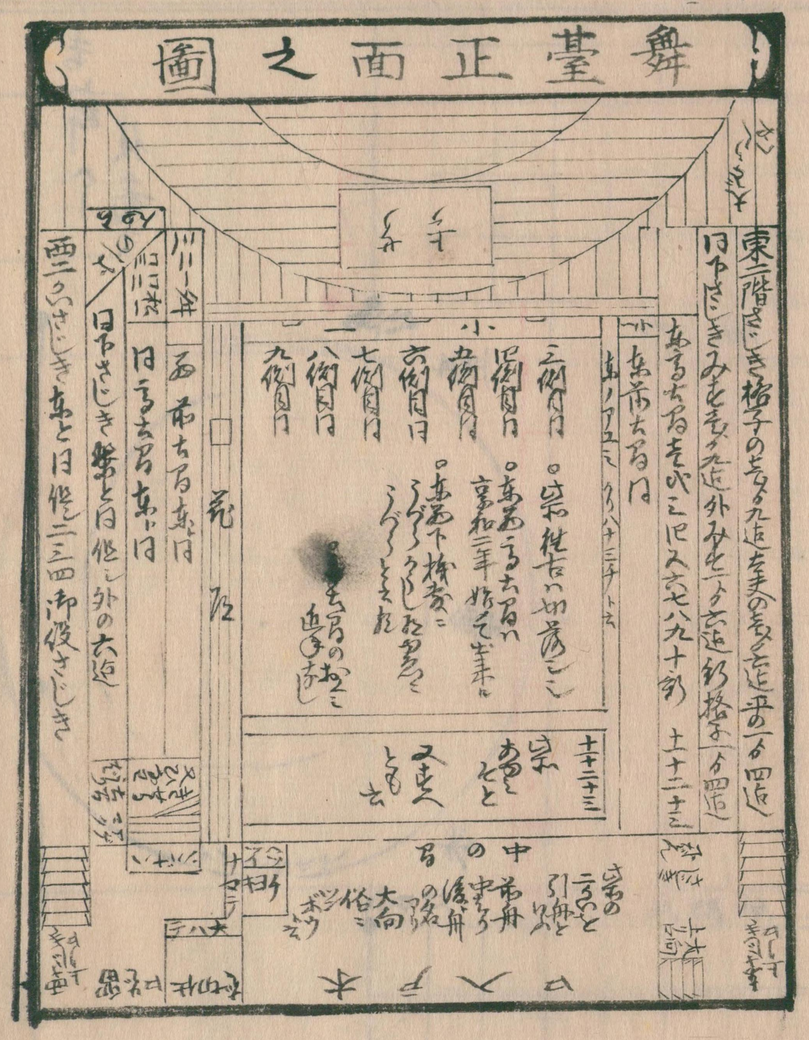
中村坐
表間口九十三間
奥行二十間
九尺二間

市村坐
表間口十二間
奥行七尺
二十間

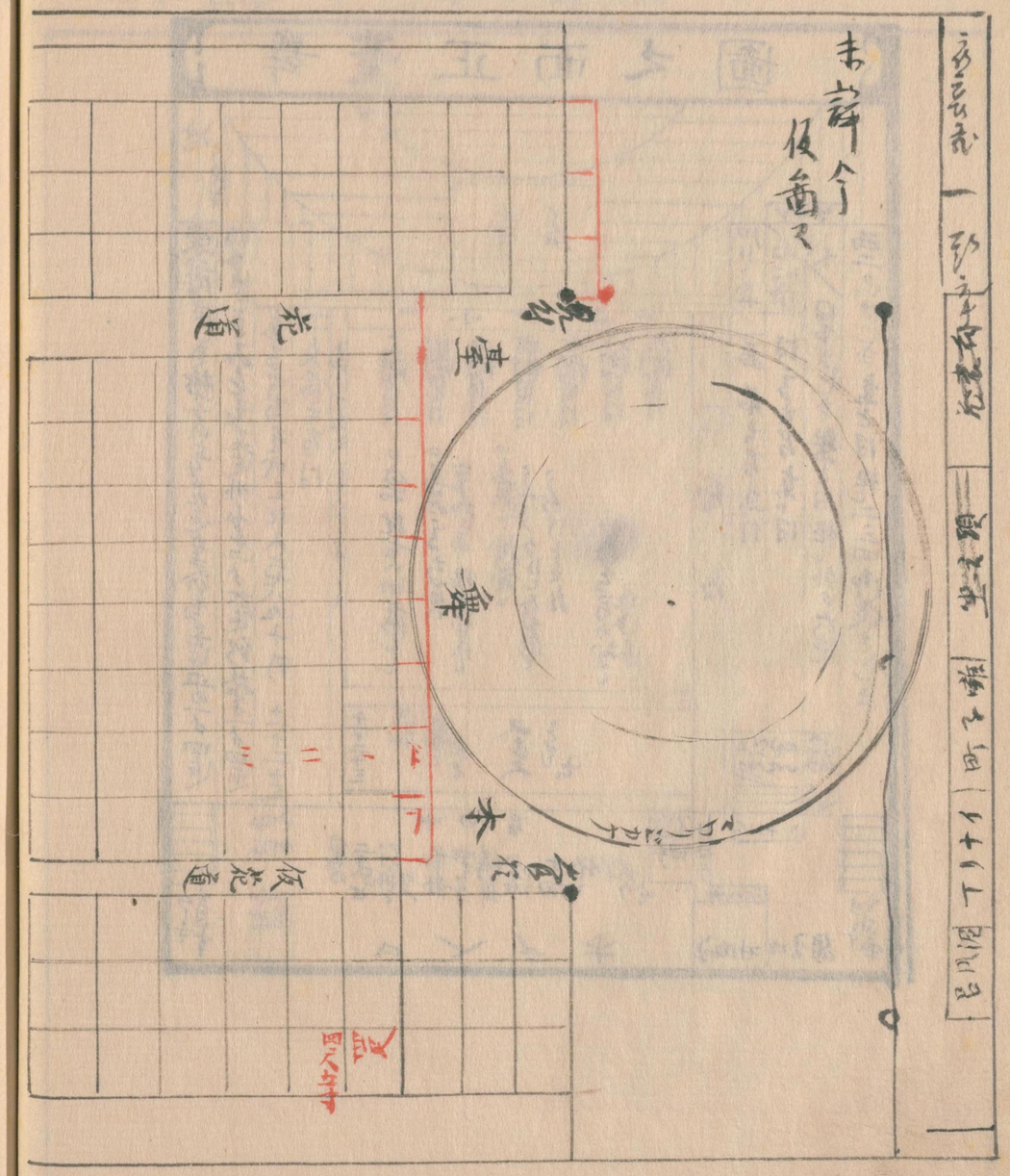
河原崎坐
表間口十一間半
奥行二十間

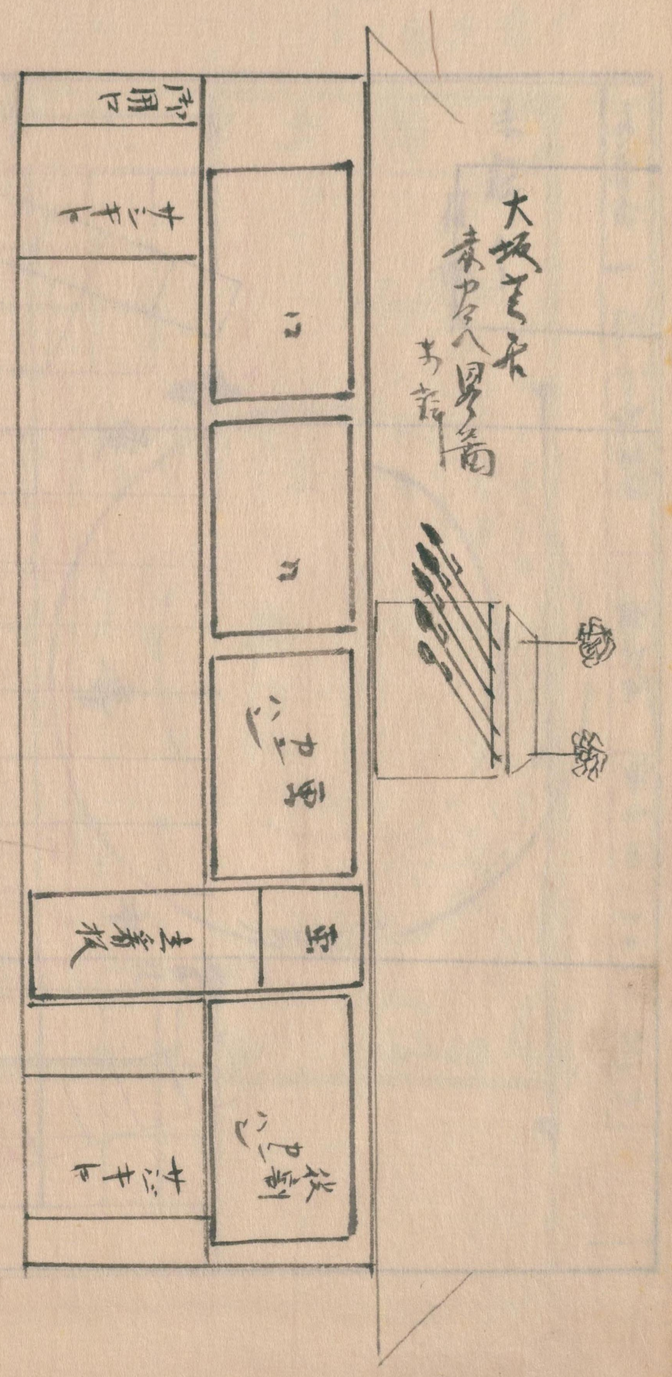
安政五年刊
猿若年代記ニ
所載

# 舞臺正面之圖




国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号　寄別13-41
ガラス使用


未辭今
仮畳ス
第七図 ハナレ図
仮花屋
仮花屋
仮花屋
仮花屋
仮花屋
仮花屋
ドブ
一
二
三
本
金
金
金




芝居割崇番彙曰京坂ノ奥場ト云者ハ江戸ニテ桟敷番ニ相当スル役ナリ
又上方ノ番帳ト云者ハ江戸ニテ「ビラ」ト云小サキ紙ヲ持テ土間其外割込ノ
桟敷ヲ改メ割様ノ有無ヲ量リ「ニタラウ」ヲ省キテ式ハ茶屋兼ガ客
式ハ芝居方ノ誰某ガ客シト矣之ノ筆ニ記スアリ
注ニ云「ニタラウ」無銭ニ見物スル人ヲ云今モ芝居ニテハ斯ト称今
俗ハ多ク「デニボウ」トシ轉訛シ古事アリ畧之
又大坂ニテ無銭観者ヲ「アナ」ト云シ青田シ是ハ故実アル尾
畧之

番帳ハ大坂観席番ノ如ク一紙縦横ニ系ヲ引横ニハ彦孫等ノ
合圏線ニハ一二番付ヲ記シ茶屋等ノ名ヲ書リ
ビラニハ一二ヨリ計ヘ舞台ノ方ノ右ヨリ表ノ方ノ左ニ終リ幾十幾ノ
ト記シ置其番付ノ下ニ番茶屋等ノ名ヲ記ス
割込ワリコミト訓シ少人数ニテ一席ヲ買得サル時ハ他ノ人ト同席
スルヲシ式ハ同茶屋ノ客ニ同席スルモアリ式ハ茶屋モ異ナル客ト同席
スルモアリ是ヲワリコミトス凡一席七人ヲ法トス席料割込ニテハ定
料ヨリ貴シ

一棧敷　直段附
一高六間　三拾人分
一平六間　三拾人分
一別合　弐拾人分
右定直段大方ハ不遠
茶屋又ハ芝居ハ
人分ヲ拾分ヲ
ものあるべしあれハとぐ
その所の名所を
と考へし如きもの

天保四年刊行三葉竹ト云書ニ所載江戸芝居
之坐席價ノ図ニシテ

# 芝居茶屋　京師ハ

大坂ハ道頓堀南岸東ハ日本橋西ハ戎橋ノ間両側大畧茶屋ニテ他業飾シ茶屋大茶屋ト茶屋ノ差別アリ並ニ家造リ表構恣格子ニテ戸口ノミヲ除キ用ヒ外モ島内坂町難波新地等ノ遊女等藝子ヲモ需ニ應テ迎之蓋是亦株アリテ彼地ハ迎ヒ此地ヲ迎フ能ハズ等アルニ元来遊女ヲ迎フ茶屋ト日株ナレバシ島ノ内天保年間後九郎右エ門町ニ近セ共今モ迎ヒ方ハ如故シ因ニ日本橋大坂ニハ二ツホニバシトハニホレバシトモ世人知ル所ナレ共古ノ大塔宮ダイタウトハ実書ナリシヲ今世ナクタウトヽ云ノ類アルガ故ニ茲ニ記ス

江戸ハ府命前ヨリ今ニ至リ遊女ヲ迎ヘズ二丁町ノ時ハ大坂町芝左三門町ハ西ハ町又二丁町ノ中又ハ芳町ニ町藝者多シ常ニ唐ヒヲ見ハ迎フ 桜若町ニ近リテ後ハ郭中ニ藝者アリ
又表構 格子ナシ 前ノ中村半ノ面ニ茶屋一戸ヲ画ケリ凡テ皆同之
且面中ノ茶屋ニ九中ニ 大德ト記シメル 挑灯ヲ軒ニ釣リ是カナ
大茶屋ノ目標ニテ他ニ用ヒフヲ聽サズ 高五尺許リ 挑灯ニテ
多クハ家号ヲ記セリ
面ノ如シ

観者食類ハ客ノ好ニヨリ又席料ニヨリ一定ナラズト雖ト大略先ツ
観席ニ付リト即時ニ煙茶及ビ番付ヲ持来リ次ニ菓子次ニ口
取肴次ニサヒミ式ハ鱶肴次ニ者肴次ニ中飯次ニ鮮果ニ水菓
ヲ以上ノ通例トス 京坂モ大日小異ハ同シ
中飯江戸ハ幕ノ内ト号ケテ四角平ノ握リ飯十顆ヲ僅ニ焼キシ
添ヘニ焼雑卵 蒲鉾 コニヤリ焼豆腐干瓢以上是ヲ六寸重箱ニ
納シ人数ニ應シ観席ニ持運ブヲ役来ノ例トス 専ラ茶屋ニテ製ス
コ勿論ナレトモ小屋ハ自家ニ調ヘズ芳町ニ製ス店アリテ一人分價銭
百文トス 笹折ニ盛リ作リ是ヲ茶屋ニハ重ニ結サセテ客ニ出スヲ
今ノ地ニ近テモ芳町ヨリ出店ヲ出シ両店ニ万久トモ名物ノ
又客ノ好ニヨリ是ヲ用ヒズ茶漬漬或ハ本膳ヲモ調スルシ是ハ専
ラ是居ニ運バズ茶屋ニテ食ス
又夜食ハ大切ノ一二幕前ニ茶屋ヨリ客ニ問テ命スルハ調ヘ進ル
熟客多リ茶屋ニテ食ゼズ却テ遠路ニナリテ後完ニ飯リ食シ或ハ
並木茶屋ナドニテ食スヲ多リ 茶屋茶屋ノ夜食ハ美食高料ノ
故シ
又二三十年前迄ハ朝昼兼着ヲ出シ次ニ吸物ヲ出セシガ近年ハ除ク
テ出サズ 不弁ナル故ト 熟客トニ係ル

又天保比迄ハ芝居ニテ出ス菓子ハ面ノ如キ編笠餅ト云ヲ用ヒ其後ハ下品席ノ三用ヒシガ近年更ニ不用ヒ凡テ美製菓子ヲ用フ

編笠餅形ニヨリ名トス本名ハ皇月新都ト云ヒ米粉ノ中ニ白砂糖アワキアニヲ挾ミニテ折ニ考ル岩代所法ニ米屋新道ト云新ニ大仏屋ト云菓子店ニテ製シ賣リ名物ノ一トシ近年芝居近地後堺町通リニ移店シ街リニ喜ハ安政元年ノ秋ニ迄ヒタリ

白赤黄萠木アリ
價四銭

京坂ハ自家ヨリ酒肴及飯ヲ携ヘ往ル者アリ昔ハ大半如此ナリシガ近年ハ街リ廃スレ共亦稀ニ無ニ非ズ百ニ一ニハ有ラン江戸ニハ自家ヨリ弁当携ル者ナシ又京坂中食ハ如厠ニテ食シ幕内弁当ニ類ス者ヲ出サズ夜食ハ京坂ニ限テ後ニ調フ

菓子 古ハ菓実ヲ云ヒ桃柿柑類ヲ云シ此類京坂今世ハ和割ヲ呼テクダモノヤ多物店ト云江戸ニテハ水菓子ト云是乾菓子アリテ後如此ニ成リ

世事談曰干菓子ハ米粉ニ出タル所ノ白雪糖ニ基キ製ス中古有平糖金米糖ノ類ヲ渡ス儀ニテ製ス臺上ノ所菓子ハ一條ノ虎屋迄江戸屋能登製ス所用ノ所菓子ハ銀町大仏保主水製ス

マニ所用ト云ハ幕内調進ヲ云シ是ハ城中ニ所番屋ト称ス後所アリテ大久保主水中ハ兼ノ人数ノ二人半月限代番ニテ調進ス 享保

30
15

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』　請求記号 寄別13-41

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『守貞謾稿』 請求記号 寄別13-41

ガラス使用